公益財団法人堺市文化振興財団
令和６年度「こども食堂における芸術家派遣事業」
事業検証調査　報告書

令和7年3月

合同会社文化コモンズ研究所

目次

Ⅰ. 検証・考察 1

Ⅱ. 事業実績 5

1. 事業概要 6

2. 事業実績 7

Ⅲ. モニタリング調査 15

1. いづはまスマイル食堂 16

2. にしのこまんぷく食堂 23

3. PROJETO CONSTRUIR 33

Ⅳ. アンケート調査 47

1. アンケート調査の概要 48

2. 調査結果 49

3. 調査票 61

Ⅴ. ヒアリング調査 65

1. アーティストへのヒアリング 66

2. 食堂スタッフへのヒアリング 71

I. 検証・考察

(1)事業実績の分析

公益財団法人堺市文化振興財団（以下、財団）が実施した、令和６年度の「こども食堂における芸術家派遣事業」では、音楽、美術、演劇のアーティストが年間を通じて堺市内の３団体のこども食堂と継続的に関わり、ワークショップを共に実施した。本事業は令和３年度から開始しており、４年度目を迎えるにあたり、担い手の多様化による将来的な地域における事業の自走、人的・経済的に持続可能な在り方を模索するため、従来の枠組みにとらわれない実施内容の企画、実施回数の設定、体制の構築などについて、こども食堂毎に検討した。令和６年度の延べ実施回数は11回、参加延べ人数は246人となっている（令和５年度は３団体、13回、332人、令和４年度は３団体、14回、260人）。こども食堂の「居場所としての機能」を高めることをめざして、それぞれの食堂で1年間の目標を設定し、食堂スタッフ・アーティスト・財団スタッフなどが信頼関係を築きながら、目標に沿った芸術ワークショップを協働で運営した。

(2)モニタリング調査

ワークショップの企画・制作・運営の経験が豊富な関西在住のコーディネーター３名に協力を依頼し、３団体のこども食堂でのワークショップに１名ずつ記録を担当し、ワークショップの状況をモニタリングした。モニタリングは各団体２回（１回目は現地訪問、２回目は記録映像の視聴確認）で、各回の詳細のレポートを作成した。記録者の主な所感は下記の通りである。

- 同じアーティストで３年目の音楽ワークショップを行ったいづはまスマイル食堂では、「場の安心感・温かさ・音楽を中心にした一体感」がすっかり定着したと感じる。これまで参加者だったこどもたちが中心となり、こどもスタッフとして参加者を受け入れる側になった。ワークショップの雰囲気を親しみやすくし、参加者たちをやさしくリードする存在になっている。また、アーティストたちにとっては、演奏家として、こどもたちという新たな共演者との出会いになっている。
- ３年目のにしのこ😊まんぷく食堂では毎年異なるアーティストでのワークショップを行ってきた。「手を動かしてものをつくる」という分野の体験であることは昨年と同じだが、進行役であるアーティストからこどもへの声かけには緊張感はなく、財団スタッフの数年間の関係や、こども側のフレンドリーさもあり、「気軽に大人に相談するのが当たり前」という雰囲気だった。手が動かない子も、作業に飽きた子も、会場内にたたずんでいるなど、この場が安心できる空間として定着している。
- 同じアーティストで２年目のPROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU（以下、PROJETO CONSTRUIR）では、昨年に引き続きブラジルにルーツを持っているこどもとその保護者が俳優と一緒に演劇を使って遊んだ。アーティストと参加者の関係性の変化は顕著で、より一層心許せる関係性になっている。また、進行役だけでなく大人たちが一緒に率先して場をつくり、こどもたちも自由に振る舞っているようで、自分で全体のバランスを考えて行動しているように見られた。

(3)アンケート調査

３団体のワークショップに参加したこどもたちと保護者にアンケート調査を行った。調査票は、こども対象と保護者対象の2種類で共通の設問を設定し、参加者各自の「初回」の参加と「最終」の参加の際に配布・回収を行った。

回収数は113件で、実施会場別の回答の割合（参加したワークショップのジャンルの割合も同じ）は、にしのこ😊まんぷく食堂（美術）が45%、いづはまスマイル食堂（音楽）が37%、PROJETO CONSTRUIR（演劇）が18%。主要なアンケート調査の結果は下記の通りである。

- こどもの回答者に「こども食堂で初めて経験したことはありますか？」という質問で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「はい」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が増加している。
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「こども食堂で出会った人について、つぎのような人はいますか？」という質問で、「なんでも悩みを相談できる人がいる」「困ったときは助けてくれる人がいる」「自分のことを正直に話せる人がいる」について、「そう思う」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が増加している。

- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「ひとのことは信じて頼ってよいと思う」については「そう思うとする回答が「初回」に比べて「最終」が増加している。
- 「今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか」という質問で、「0 まったくおすすめできない」から「10 とてもおすすめできる」までの11項目から一つを選択してもらったところ、「10 とてもおすすめできる」が51.3%、「５」が12.4%、「７」が9.7%となっている。11項目を数値として平均化すると8.6点となっている。また、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較すると、「初回」では8.2点、「最終」では8.8点となっている。

(4)ヒアリング調査

ワークショップを行ったアーティスト3名と、こども食堂スタッフ3名、それぞれを対象にグループインタビューを行った。インタビューでは、「関連プログラムの実績」「プログラムへの期待」「こどもの居場所へアーティスト派遣することの価値」「実施に向けた課題」などを共通の質問項目とした。ヒアリングで聞かれた主要な意見は下記の通りである。

- 同じこども食堂で継続して音楽のワークショップを行ってきたアーティストからは、こどもの成長や変化を驚きとともに喜ぶ意見が相次いだ。同一アーティストで３年目を迎えるいづはまスマイル食堂では、「こどもスタッフ」として関わってもらい、アーティストと同僚のような、「バンド感」と呼ぶ人間関係やチーム構成ができている。
- 同一アーティストで２年目を迎えるPROJETO CONSTRUIRは、ブラジルにルーツを持つこどもや保護者との演劇ワークショップを通じて、言葉を「壁」と感じさせないコミュニケーションができている。今年度は活動の場所をこども食堂から地域に出て行い、体を自由に動かして開放感を感じながら表現の意欲を高めることになった。
- にしのこ😊まんぷく食堂では、今年度が初回のアーティストが段ボールを素材にしたお面を制作する美術ワークショップを行い、最後は施設の外に出てお面を被ってダンスを踊るという流れで、２年前であれば恥ずかしがってダンスを拒否した子が、生き生きと踊っていた。こどもの中には、家庭でワークショップのことを話題にしている様子も伺えた。
- 食堂スタッフからも、継続によるこどもの変化を強調する意見が多かった。PROJETO CONSTRUIRでは、ワークショップを続けてきた影響なのか、学校で少し暗い様子のこどもや「恥ずかしい」と言うこどもが、徐々に話せるようになったという。いづはまスマイル食堂では、ワークショップに来てこどもスタッフとして関わっている子たちは、食堂の運営にも非常に積極的に手伝っている。
- ３つの食堂では、基本的にワークショップの継続を望む一方で、より多くのこども食堂に実践が広がること強く要望している。財団主催事業以外にも、社会福祉法人堺市社会福祉協議会（以下、堺市社協）が紹介する施設・団体や、自治会が行う地域行事にアーティストが訪問するなど、より一層のワークショップの広がりが期待されている。

(5)全体を通した考察

令和６年度の「こども食堂における芸術家派遣事業」の結果（アウトプット）は、実施会場３団体、延べ実施回数11回、延べ参加人数246人で、過去３年の事業実績と比較するとやや少ないものの、将来的な実施主体の地域移行を見据えた人的・経済的な持続可能性を確保するために無理のない規模だと考える。

事業の成果（アウトカム）について、モニタリング調査やヒアリング調査では、継続してきたことでこどもが成長し、ワークショップへの参加を誘導される立場から誘導する役割に変化したことや、自己肯定感やコミュニケーションでの自信が培われてきたことが伺える。

アンケート調査でも、こども食堂での出会いで「なんでも悩みを相談できる人がいる」「困ったときは助けてくれる人がいる」「自分のことを正直に話せる人がいる」という実感が、複数回のワークショップに参加した同一人物の、初回よりも最終で「そう思う」回答が増えていることなど、数値的にも成果が表れている。

こうした成果を受けて、事業の波及効果（インパクト）としては、こども食堂でのワークショップが、こども各自の成長と併行して、こども同士、あるいはこどもと食堂スタッフとアーティストの関わり方を変化させており、地域における世代を越えた文化活動の「チーム」が形成されつつあると考えられる。

今後の「こども食堂における芸術家派遣事業」では、これまで蓄積してきた事業のノウハウ、ネットワーク、事業で得られた成果を基にしながら、市内の他のこども食堂、さらには他地域のこども食堂での実践のモデルとなることが期待されている。

II. 事業実績

1. 事業概要

(1)全体概要

- 堺市内のこども食堂（３か所）を対象に年間複数回の芸術ワークショップを企画・実施することで、こども食堂の「居場所としての機能」を高めることを目標として実施する事業。令和３年度に開始して、今年度が４年目となる。
- 事前にヒアリングした内容を基にそれぞれの食堂で1年間の目標を設定する。期間中は同じアーティストが継続的に関わり、食堂スタッフ・アーティスト・財団スタッフなどが信頼関係を築きながら、目標に沿った芸術ワークショップを協働で運営していく。
- これまでの芸術ワークショップでは、こどもにとって自分なりの仕方で他の人と関わる様子が見られ、また食堂スタッフにとっては日頃接するこどもの違う一面が見られる機会となった。またアーティストにとっては、こどもと関わることで自らの芸術ジャンルにおいて新しい表現の可能性を発見する機会となった。
- なお経年で関係者間の信頼関係は強化され、食堂スタッフ自身も各々の立場から芸術ワークショップの可能性を言語化するようになった。他方でこの取り組みが４年度目を迎えるにあたり、担い手の多様化による将来的な地域における事業の自走、人的・経済的に持続可能な在り方を模索するため、従来の枠組みにとらわれない実施内容の企画、実施回数の設定、体制の構築などについて、こども食堂毎に検討することとした。

(2)実施団体と年度当初の活動方針

◉いづはまスマイル食堂（西区浜寺船尾町）

進行役

古橋果林（音楽ワークショップリーダー/ファシリテーター）

進行アシスタント

岩本未貴（ユーフォニアム）、藤原朱里（サクソフォン）、西前菜々子（クラリネット）、森千夏（ソプラノ）

概要

いづはまスマイル食堂は、堺市西区浜寺東小学校区に位置するこども食堂。天理教泉濱分教会の施設を活用する形で実施されており、参加者やその家族の状況を熟知する実践者によって運営されている。この食堂では令和４年度から古橋果林さんと音楽ワークショップを毎年通年で実施してきた。

音楽ワークショップとは、演奏、楽器遊び、即興、創作を通じて、参加者が他者と関わり合い、互いに創意工夫する場づくりの実践と言える。これまでの取り組みは、コロナ禍で減少してしまった対面で集う場を取り戻すきっかけとなり、未就学児から高学年の児童、保護者や地域の大人など、様々な人が自分なりのかたちで関わる場を創出してきた。

３年目となる今年度は、過去に参加したアーティストを進行アシスタントとして再び起用したことで、アーティストとこどもたちの関係がさらに深まりを見せた。また、音楽経験のある/なしや年齢に関わらず、参加者がそれぞれの方法で音楽に参加できるようワークショップを工夫した。成長したこどもたちにはスタッフの役割を任せ、他者に必要とされる経験を積み重ねた。

目標

- 古橋果林さん（音楽ワークショップリーダー/ファシリテーター）と過去に進行アシスタントとして参加したアーティストによる音楽ワークショップを３回実施する。
- 期中にはこどもとアーティストがワークショップ以外の時間でも親交を深める。成長したこどもにはスタッフの役割を与える他、各世代がそれぞれの形で参加できる場づくりを行い、参加者の受容感、自己肯定感を醸成する。
- これまで関与したアーティストたちとこどもたちの関係性を大切に、場を共に過ごす時間を今年度も積み重ねたい。食堂スタッフが気になる家庭のこどもにも積極的に参加を呼びかけ、遊びの中に、こどもたちの自尊心、自己肯定感、相互に受容される感覚を育てていきたい。

◉にしのこ😊まんぷく食堂（堺区協和町）

進行役

井上嘉和（写真・造形）

サポートアーティスト ※最終回11/20のみ

一般社団法人ANTIBODIES Collective　東野祥子、松木萌（ダンサー）
ンコシ・アフリカ　河辺知美、北村圭子、中西久美子（音楽家）

概要

　にしのこまんぷく食堂は、堺市堺区大仙西小学校区に位置するこども食堂。活動は堺市人権協会をはじめとした地域の団体や個人ボランティア等によって運営されている。食堂の属する地域は長い間、住民が支え合ってきた社会・歴史背景があることから、地域における住民同士の結びつきが重視されており、食堂自体が地域に支えられ運営されている。そうした背景をもつ食堂の実践者からは、ワークショップを企画するプロセスで、「地域でこどもを見守り育てたい」「こどもには自身の住む地域に親しみを持ってほしい」という、地域との繋がりについての希望が多く聞かれた。

　過去のワークショップにおいて地域のこども達が「ものづくり」に没頭した経験から、こどもと大人が同じ立場で関わり合い、信頼関係を築くことを目的として、井上嘉和さんとともに、ダンボールでお面を制作する「ダンボルワークショップ」を実施した。また、ワークショップ最終日には、こどもたちが自分で制作したお面をかぶり、「こどもが地域を遊びこなせるようになる」ことをコンセプトにして、閉鎖予定の団地や地域の公園で、ダンサーや音楽家とともに体を動かし、撮影会を実施した。実施の様子は、地域住民や行政職員にも見守られた。

目標

- 井上嘉和さん（写真・造形）による、大人とこどもが一緒になって段ボールでお面を制作する「ダンボルワークショップ」を中心に、制作したお面をかぶって地域に繰り出し、遊び、また地域の各場所・施設で撮影会などを行う。
- 大人とこどもがお面を一緒につくり、一緒に遊ぶことで、一体感や信頼関係をつくり上げることを大切にする。
- 昨年度同様、地域一体と連携した事業を行い、こどもが遊びを通して地域の施設や大人と深く繋がること。また、地域の各場所・施設で実施するお面遊びや撮影会などを通じて、こども自身が地域を遊びこなせるようになることを目標としたい。

◉PROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU（堺区石津町）

進行役

大熊ねこ（俳優/ワークショップデザイナー）

進行アシスタント

はせなかりえ（俳優）、池川貴清（俳優）

概要

堺市堺区にあるこども食堂で､堺市内外からブラジル系のルーツを持つこどもと保護者たちが集まる。こどもはゲームをしたり､宿題をみんなでやったりし､保護者は日頃の悩みを共有したりしている｡特定の属性に特化した市内では珍しい食堂。実践者の田中ルジアさん自身もブラジルにルーツがあり、託児施設から始まったプロジェクトを引き継ぎ、現在はこども食堂として運営している。

今年度は、昨年度から参加者の中で高められつつある自己肯定感を土台に、大熊ねこさんを中心としたワークショップを通じて､さらに自分の本音や思いを表現できるようなマインドが形成されること､参加者の心や人間関係を耕すことを目標とした。演劇的手法を活用したコミュニケーションゲームで遊びながら、その時々の気分や興味に応じて柔軟にワークショップの内容を選択・アレンジしていった。10月には､食堂自身が予定する発表会が控える中で､その準備のプロセスで､こどもも大人もお互い意見を交わし、尊重し合いながら進めていけるような土壌づくりになることも期待した。

目標

- 大熊ねこさん（俳優/ワークショップデザイナー）によるブラジルルーツのこどもたちとの演劇ワークショップ。
- 昨年度に引き続き演劇ワークショップによって､こども･食堂スタッフ･アーティストが共に場を過ごし、それぞれ心や人間関係を耕す機会にしたい。
- 10月に食堂自身が予定する発表会に向けて、こどもも大人もお互い意見を交わし、尊重し合いながら進めていけるような土壌づくりをしたい。開催場所を柔軟に設定しながら同食堂の持つ可能性についても模索する。
- 今年度は、参加者の中で高められつつある自己肯定感を土台として、さらに自分の本音や思いを表現できるようなマインドの形成をめざす。

2. 事業実績

(1)実施回数・参加人数

	いづはまスマイル食堂	にしのこ😊まんぷく食堂	PROJETO CONSTRUIR
アーティスト	古橋果林（音楽ワークショップリーダー/ファシリテーター）	井上嘉和（写真・造形）	大熊ねこ（俳優/ワークショップデザイナー）
共演またはアシスタント	岩本未貴（ユーフォニアム）、西前菜々子（クラリネット）、藤原朱里（サックス）、森千夏（ソプラノ）	（最終日のみ）東野 祥子、松木　萌（ダンサー）、河辺 知美、北村 圭子、中西 久美子（音楽家）	はせなかりえ（俳優）、池川貴清（俳優）
実施日（参加者数）	令和６年 8月24日　(25人) 11月10日　(29人) 令和７年 1月18日　(33人)	令和６年 9月18日　(21人) 10月16日　(23人) 11月13日　(32人) 11月20日　(24人)	令和６年 7月27日　(17人) 8月10日　(17人) 9月28日　(13人) 10月19日　(12人)
実施回数	3回	4回	4回
参加延べ人数	87人	100人	59人

こども食堂における芸術家派遣事業の合計

実施会場…… 3団体

延べ実施回数……11回

参加延べ人数……246人

(2)活動内容

◉いづはまスマイル食堂

令和６年８月24日（１回目）

初回のワークショップは、小学生を主な対象として実施したが、きょうだいである未就学児の参加も多く、参加者の年齢は低めであった。前半は、音やリズムをボディパーカッションで真似するワークや、好きなフルーツで即興的にジュースの歌をつくって歌うワークを行った。後半は、好きな楽器を選び、それぞれが探した「海の音」を、ルーパーで重ねて音楽を創作した。最後に全員で『海』を歌い、演奏には参加者の小学生がピアノで加わった。

令和６年11月10日（２回目）➡P.17 モニタリング調査

継続して参加者の年齢が低い傾向にあったことから、今回から対象を未就学児とその保護者とし、小中学生は「お手伝いスタッフ」として役割を持って参加した。楽器を使ったアイスブレイクのあと、５拍子の音楽を使ってボディパーカッションのワークをした。ルーパーを用いたセッション、『紅葉』を歌うワークに続いて、スカーフを揺らして踊るワークを行った。最後は、令和４年度のワークショップで創作した『いづはまスマイル食堂の歌』を演奏し、新しい参加者に紹介した。

令和７年１月18日（３回目）➡P.20 モニタリング調査

最終回のワークショップも親子を対象として実施した。「お手伝いスタッフ」の小中学生は、以前よりも自信を持ってワークショップに関わり、はじめての参加者をリードする様子が見られた。参加することもたちも、自分が楽器を鳴らしていても周りの音をきちんと聴くことができ、回を重ねるごとに音楽への関わり方がレベルアップしたように感じられた。

◉にしのこ😊まんぷく食堂

令和６年９月18日（１回目）➡P.24 モニタリング調査

初回から想定以上の参加人数となり、物づくりへの興味の高さがうかがえた。材料として、土台となるヘルメット部分と、短冊形の段ボール、そして板状の段ボールが用意された。道具としてはグルーガンを使用したが、昨年度も使っていたこともあってか、こどもたちは積極的に手を動かしていた。ワークショップの終わりには、撮影ブースに移動し、お面を被った状態で井上さんが撮影を行った。

令和６年10月16日（２回目）➡P.29 モニタリング調査

やけどの対策として布製の手袋を用意したことで、作業中の怪我の予防に繋がった。前回から継続して参加しているこどもも多く、１回目での経験を活かして、各々が完成イメージを持って取り組むことができたことに加え、武器や羽など、小道具づくりをするこどもたちも多かった。また、今回初めて参加した子に対して、自分でつくったお面を自慢したり、つくり方を教え合ったりするコミュニケーションもあった。

なお、当日は５年生が学級閉鎖だったため、参加することができなかった。１回目のワークショップに積極的に参加していたこどもの多くが５年生であったため、急遽、追加で11月13日にもお面づくりをすることが決まった。

令和６年11月13日（３回目）※追加実施

10月16日に学級閉鎖となった５年生を対象とした追加開催。結果として５年生以外も参加し、そのほとんどがリピーターで、新規の友達を誘って参加している子もいた。この食堂で開催したこれまでのワークショップで一番多い、27名の参加があった。

令和６年11月20日（４回目）

４回目は、これまでのワークショップで制作したお面を被って、閉鎖予定の団地や地域の公園で撮影会を実施した。こどもたちの気持ちを盛り上げ、ポーズを引き出す役として、ダンサーとアフリカ音楽を演奏するグループに協力を依頼した。

堺市立人権ふれあいセンターに集合し、ウォーミングアップで身体をほぐした後、団地のデッキから最後は公園に移動して撮影を行った。こどもたちはダンサーのリードや、太鼓の音によって、大きく自由に表現することができ、食堂スタッフたちもこどもたちの新たな側面に出会うことができた。また、その様子を通りがかった人達が見ていく様子も見られたことも、大きな成果だったといえる。

◉PROJETO CONSTRUIR KODOMOSHOKUDOU

令和６年７月27日（１回目）場所：大阪いずみ市民生活協同組合本部

開始時刻を過ぎても予定していた参加者が集まらず、すでに集まったメンバーで話をするところから緩やかにワークショップが始まった。初めてワークショップに参加する人も含め、アーティストと久しぶりに「出会い直す」ワークが組まれ、自己紹介の時間を多めに取り、昨年度も行った拍手回しを行った。後半は、「だるまさんがころんだ」にアレンジを加え、動物や食べ物になりきってポーズをしたり、声を出さずにやってみたりしたところ、自由な表現やみんなで１つの空間を楽しむ雰囲気が生まれた。

令和６年８月10日（２回目）場所：大阪いずみ市民生活協同組合本部

ニックネームをコール＆レスポンスするワークから開始した。昨年の経験からか、１人ひとりが生き生きと参加する様子が見られ、次に続くワークにもスムーズに移行することができた。２人ペアで取り組んだ「ナイフ＆フォーク」のワークでは、「はさみ」「カップとソーサー」等のお題に対して、個性的な表現がいくつも見られ、徐々に人数を増やし、動物や場所など、さまざまなお題に挑戦した。参加した大人たちも全力で楽しみ、遊ぶ様子が見られた。

令和６年９月28日（３回目）場所：サンスクエア堺 **➡P.34 モニタリング調査**

アイスブレイクとしてコール＆レスポンスを実施したあと、誰かの動きを鏡のように真似をする「ミラー」のワークに取り組んだ。このワークの応用として、「ダイヤモンドダンス」というリーダーの真似をしながらダンスをしていくワークに挑戦した。真似をすることで、自分だけでは生まれない表現をやってみることができ、且つ、みんなでひとつの作品をつくるという団結力も生まれた。広い空間だからこそ取り組めたワークであり、伸びやかな表現が引き出されたと思われる。

令和６年10月13日（発表会）場所：アプラたかいし ※食堂主催、アーティスト・財団は見学

食堂自身が企画した発表会が、アプラたかいし（高石市）で行われ、大熊ねこさんも観客として見学した。歌や詩、劇の発表を鑑賞する中で、ワークショップ参加者のこの２年の成長を見ることが出来た。

令和６年10月19日（４回目）場所：PROJETO CONSTRUIR（民家）**➡P.38 モニタリング調査**

最終回は、発表会を経たふりかえりの場として設定された。アーティストや財団職員で事前打ち合わせをする予定だったが、参加者も同じ場所に集まってきていたため、そのまま打合せに入ってもらうこととなり、話をしながらなだらかにワークショップに移っていった。「おうちに泊めて」というワークで遊んだあと、後半の時間では、これまでの事を振り返ると同時に、今後の目標についても話し合われた。

III. モニタリング調査

※ワークショップの各回の参加者の数は事業実績（P.10）での参加人数を公式な記録としているが、Ⅲ.モニタリング調査では、ワークショップでの参加者の属性や様子を報告するため、記録者が確認した参加人数をそのまま掲載している。なお、開催当日の活動状況や参加人数の規模によって、記録者の目視でのカウントや事前申込の人数など確認の方法が異なるため、事業実績での参加人数と異なる箇所がある。

1. いづはまスマイル食堂

記録者	内山幸子
会場	天理教泉濱分教会 2 階講堂
進行役・進行アシスタント	
進行役：古橋果林（音楽ワークショップ・リーダー/ファシリテーター） 進行アシスタント：岩本未貴（ユーフォニアム）、西前菜々子（クラリネット）、藤原朱里（サックス）、森千夏（ソプラノ）	
記録に関する補足説明	
古橋さんは令和 4 年度と 5 年度の進行役。西前さん、森さん、藤原さんは令和 4 年度、岩本さんは令和 5 年度の進行アシスタント経験者。いづはまスマイル食堂の古藤夫妻が「せっかくこどもたちとの関係が深まったので継続して来てほしい」との声を受けてリピーター参加することに。進行役と進行アシスタントも共演に慣れてきたことから進行アシスタントが進行を担当するパートが生まれた。過去 2 年間の参加者だった中学生たちもこどもスタッフとして参加。今回も募集対象は未就学児の親子。	

いづはまスマイル食堂　記録１回目：令和６年11月10日（日）

時間	11:00開始〜11:50終了（計50分）		
参加者	こども	19人	乳児２人、２歳３人、３歳２人、４歳１人、年少１人、年長５人、小学１年生１人。こどもスタッフ小学３年生３人、小学５年生1人。
	食堂スタッフ	2人	古藤一彦さん、古藤喜代恵さん
	財団スタッフ	3人	川﨑さん、常盤さん、半田さん（インターン）
	その他の参加・視察者	13人	保護者10人（こどもと一緒に参加）、「音楽で人と人をつなぐワークショップスキル夏季集中講座」受講生3人（ワークショップ実践の見学）。

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
11:02	こどもスタッフ全員	参加者	１階から2階の会場へ誘導。半円に座ってもらう。
11:05	古橋さん・進行アシスタント	参加者	アーティストたちが入場。自己紹介と楽器紹介を行う。演奏曲は《シーサイド・ランデヴー》。
	古橋さん	参加者	参加者が古橋さんのからだの動きをまねる。手拍子のリズムをまねる。
	古橋さん、西前さん	参加者	５拍子のリズムで遊ぶ。演奏曲は《テイク・ファイブ》。
11:20	こどもスタッフ全員	参加者	５拍子の練習。森さんの合図「う・さ・ぎ」で参加者が手拍子、「か・め」でこどもスタッフがハンドベルと笛を鳴らす。演奏曲は《ミッション・インポッシブルのテーマ》。
11:25	こどもスタッフ全員	参加者	こどもスタッフが参加者にエッグシェイカーまたはギロを、ひとりに１個ずつ配る。
	古橋さん	参加者	みんなで立ち上がって、エッグシェーカーやギロを合図に合わせて鳴らす・止めるの練習をする。こどもたちが慣れたところで、古橋さんがルーパーを使ったセッションを披露した。演奏曲は《アップタウン・ファンク》。
11:35	Aさん、Bさん、Cさん		古橋さんが「ルーパーに録音したい人！」と声をかけると、Aさん、Bさん、Cさんの３名が挙手し、ギロをこする音を録音した。Cさんは音出しのあと「終わった！」と大きな声で宣言した。自分の音を録音した３名は、その後のルーパーセッションをノリノリで踊った。
	こどもスタッフ	参加者	こどもスタッフがエッグシェーカーとギロを回収する。参加者のこどもたちが自発的に回収箱に入れた。

11:40	森さん	参加者	森さんのリードで「ラ・ラ・ラ」で歌う。こどもスタッフDさんがピアノ演奏し、古橋さんが伴奏した。演奏曲は《紅葉》。
	こどもスタッフ	参加者	こどもスタッフがスカーフをひとりに1枚ずつ配る。
11:43	古橋さん	参加者	古橋さんの指示に合わせてスカーフを上下させる練習をしてから、輪になってスカーフを振りながら歩き始める。こどもスタッフもスカーフで輪に入る。最後は全員でスカーフを丸めて宙に投げ、終了。演奏曲は《風になりたい》。
	こどもスタッフ	参加者	こどもスタッフがスカーフを回収。
11:48	古橋さん、進行アシスタント		《いづはまスマイル食堂の歌》の歌詞カードが配布され、みんなで歌う。こどもスタッフDさんがピアノ演奏し、古橋さんが伴奏した。
11:50	古橋さん	全員	終了の挨拶。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- 演奏家が５人いると演奏が充実する。また、フォロー役に回るなど、いろんな役割がこなせると思った。進行アシスタントも主体的に進行を担ったが、スムーズに回せたと思う。ワークショップ参加者は年頃が近かったせいか和気あいあいとして全体的によい雰囲気だった。
- いづはまスマイル食堂では、いつも場の温かさを感じる。譜面台によって、演奏家の位置が固定されてしまった。もっと参加者の円の内側に入っていく姿をこどもスタッフにも見せられたら、彼らももっと入れたかもしれない。
- 演奏家側と参加者側で場所が分かれてしまったため、演奏がバックミュージック的になってしまった。継続参加のこどもたちがあたたかい雰囲気をつくり出してくれていた。
- 初年度はこどもたちへの接し方やこども食堂という場について考えることが多かったが、今回は自分にとって音楽的な学びがあり、ここでしかできない音楽体験ができている。普段の音楽活動では出会えない進行アシスタントたちとのアンサンブルも、よい経験になっている。
- 進行の細かな部分での反省はあるが、どれも次に活かせる内容。プレイヤー同士のコミュニケーションが進展すると全体にもう一歩進むだろう。スピーカーなど機材のセッティングで時間に追われたので、機材を使うときはいつもより30分早めに会場入りする必要がある。この進行メンバーなら、こどもたちの反応に応じて即興的にプログラムをアレンジしていくこともできるだろう。
- こどもスタッフは恥ずかしがってはいたけれども、「プラスになる恥ずかしがり方※」だったと思う。小さい子たちも上手で、簡単にする必要がなかった。聴ける演奏になっていた。 ※発言者の意図を解釈すると、こどもスタッフが恥ずかしそうな表情や素振りはあったけれども、(もじもじして参加者に背中を向けてしまった前年度と比べて)初対面の人と思い切って関わったり、経験したことのないことに挑んだりする姿勢を評価した発言だと思われる。

こども食堂スタッフ

- Gさんの保護者として参加したが、Gさんはすでに場になじんでいる。参加者はみんなワークショップに集中していた。こどもスタッフの子たちはみんな知らない子だったが、「えらいなあ」と思った。

財団スタッフ、見学者（「音楽で人と人をつなぐワークショップスキル夏季集中講座」受講生）

- 音楽的なバランスがとてもよかった。
- 保護者の一人が「演奏家のみなさんの笑顔が素敵でした」と話してくれた。ワークショップは温かい空気ができていて、２回目参加すると、もっと（お互いの距離が縮まって、音楽としてもできることが）進みそうだし、楽しめそう。

- 参加者のこどもたちが強制されることなく自然とできていた。年長のこどもが自然と小さい子をケアしていた。
- 安心感のある場。参加者もみんな音楽の一部になれていた。

◉記録者による全体の所感

初年度はこどもたちの参加のモチベーションも年齢もバラバラで、どのようにこどもたちの関心を音楽に向けるか、苦労していた印象がある。こども食堂のスタッフに誘われて参加したけれど、「ワークショップって何をするの？」という様子だった。今年度は、ワークショップの楽しみを知った馴染みの参加者が新しい参加者を連れてくるので、モチベーションの度合いが揃ってきたようだった。また、こどもスタッフがアーティストたちと並んで前に立って演奏することで、ワークショップの雰囲気をより親しみやすくし、幼児もワークに集中しやすい環境をつくっているように思う。みんなのリラックスした様子から、振り返りでみんなが口をそろえて語ったように、「場の安心感・温かさ・音楽を中心にした一体感」がすっかり定着したと感じる。

振り返り後、古藤喜代恵さんが記録者に「今回は行事が重なって不参加だったが不登校のこどもたちがいて、音楽ワークショップは普段気にかけている子たちをこども食堂に誘うよい口実となっている。もっとこどもたちの居場所機能を強化していきたい」と真剣な面持ちで語っていた。古藤さんたちが地域のこどもをよく観察し、丁寧に声かけをしてくれることも、いづはまスマイル食堂でのワークショップを温かい場にしている大事な要素になっている。ここでの人間関係に癒されるという福祉的な効果も今後望まれるのではないだろうか。

昨年度と比較して、今年度に新たに気づいた点は以下の通り。

- 入場時の進行役のアーティストたちによる演奏が“つかみ”となり、ワークショップの空気をリードした。ステージと客席のような段差がなく、フラットな空間で音楽家による演奏の音に包まれる体験は迫力があり、気持ちがよい。
- 古橋さんと過去に進行アシスタントを務めたアーティストたちが再び協働することになり、各パートを代わる代わる進行アシスタントが担う場面があった。
- ワークショップを実施している最中に、過去に参加していた親子が１階で昼食の給仕役として活躍していた。ワークショップをきっかけに食堂を訪れ、食堂とのさまざまな支え合いの関係が生まれている。
- 参加者の後方にいた記録者からは、こどもスタッフたちが緊張しすぎているように見えていたが、アーティストたちは「プラスの恥ずかしがり方」と表現していた。ワークショップの輪の中にいるか外にいるかで見え方に差が生まれる。
- この日のワークショップは50分と短い時間だったが、場を離れたがるこどもはおらず、全員で集中して取り組んだ。「音楽と出会う体験」から「音楽を中心に集まり、みんなで音楽を楽しむ場」への発展を感じた。

いづはまスマイル食堂　記録２回目：2025年1月18日（土）

時間	11:00開始〜11:50終了（計50分）		
参加者	こども	13人	8組13人（動画で確認できた人数）。
	食堂スタッフ	1人	古藤一彦さん
	財団スタッフ	3人	川﨑さん、恒川さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	1人	大澤さん（本検証調査リーダー）

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
11:03	古橋さん・進行アシスタント･こどもスタッフ	参加者	演奏家が部屋の全体に散らばって入場曲を演奏。こどもスタッフは、それぞれピアノ、ファイフ、タンバリンで演奏に参加。演奏曲はアメリカの音楽。
11:05	森さん	参加者	森さんがタンバリンでリズムを取りながら、みんなで「い・づ・は・ま」と声を出す。音楽に合わせて発声してみる。演奏曲は引き続きアメリカの音楽。
11:08	古橋さん	参加者	古橋さんが自己紹介し､進行アシスタントとこどもスタッフ､演奏した楽器を紹介。こどもスタッフも進行役たちと同じようにみんなから拍手を受ける。
11:11			ウォーミングアップとして、自分のからだをこする、隣の人とからだをこすり合いっこする､自分のからだの一部分を叩く｡進行役のまねっこをしながら自分のからだの一部を叩く。
11:16	西前さん	参加者	西前さんによる『みんなで愛をつくろう！』のコーナー。「愛って何？と考えながら演奏を聞いてみましょう」と声かけして演奏を聴く。演奏曲はバラード調の音楽。
			「愛を言葉で表現するのは難しいので、からだで表現してみましょう」と声かけしてワークをスタート。ペアやグループになって握手する、抱き合う、全員で手を繋いで大きな円をつくり、音楽に合わせてからだを揺らす。「大きな愛ができました」と締めくくる。
11:17	こどもスタッフ	参加者	こどもスタッフが楽器（ギロ、シェーカー）を1人ずつに手渡していく。参加者はしばらく自分なりに叩いて音を出してみる。
11:19	岩本さん	参加者	岩本さんによる『楽器を演奏しよう！』のコーナー。進行アシスタントのまねっこをしながら、楽器を鳴らす回数（1・2・3・4・5回）や大きく／小さく鳴らす練習をする。さらに古橋さんのピアノ伴奏をつけて皆で演奏。演奏曲は《リベルタンゴ》。
11:27	古橋さん、進行アシスタント	参加者	進行アシスタントたちのソロパフォーマンスパートをみんなで聴いたあと、全員が立ち上がって再び楽器を使って演奏に

			参加する。
11:29	古橋さん､こどもスタッフ	参加者	こどもスタッフが参加者のもとに回収箱を持っていき､楽器を回収していく。古橋さんのピアノ演奏が流れ始める。
11:31	古橋さん、西前さん	参加者	『歌おう！』のコーナー。まずは幕間から続く演奏をみんなで聴く。古橋さんのピアノに、西前さんがサングラスとコートを身に着けた姿でクラリネットを演奏。演奏曲は《サマータイム》。
11:34	岩本さん	参加者	「ダ・ダ・ダ」でみんなも演奏に合わせて歌うように岩本さんが誘導する。
11:39	古橋さん	参加者	ひとり1つ好きな楽器を選んで持ってもらう。しばらくいろんな音の出し方を自分なりに味わう。古橋さんが「みんなに自分の選んだ楽器の音を紹介してください」と言って、ひとりずつ、好きな鳴らし方、好きなリズムで鳴らしてもらう。
11:42	古橋さん	参加者	『みんなで宝島を演奏しよう！』のコーナー。全員で立ち上がって、古橋さんのまねっこをしつつ、鳴らす・止めるの練習。「室内を自由に行進しながら鳴らし、他の人と目が合ったらニッコリしてね」と言って全員で動き始める。演奏曲は《宝島》。
11:46	全員		全員で部屋いっぱいに動きまわりながら演奏。最後にもう一度演奏メンバーとこどもスタッフを紹介して、終了。
11:49	古橋さん、進行アシスタント	参加者	ワークショップで作詞された《いづはまスマイル食堂の歌》を紹介。みんなで演奏を聴く。
11:50	古橋	全員	終了の挨拶。

◉記録者による全体の所感

前回のワークショップの振り返りより、進行アシスタントが参加者の輪に入っていきやすい配置に変更された。また、こどもスタッフは演奏のサポートをする、楽器を配る・回収するという役割が明確にあって、それ以外の時間は自然にワークショップに参加している。バンドのメンバー紹介のように、参加者親子に向かって紹介されていた。小さいこども参加者たちは、自分に近い年上のこどもスタッフたちのふるまいを見ることで、落ち着いてワークショップに参加できているのではないだろうか。成長の段階が様々なこどもたちの集まりで、集中力の途切れている子も見られたが、全体としては終始みんなで音楽を楽しむ時間になっていたと思う。進行アシスタント役が次々に進行を担うようになったことで、古橋さんがピアノ演奏する場面が増え、場面転換も含めたワークショップの時間全体が音楽で演出されていた。これによって、ひとつのコンサート公演を観たあとのような、音楽鑑賞の満足感もあったのではないだろうか。

３年間のモニタリング調査に関わっている立場から､ここでこれまでの変化を今一度振り返っておきたい。1年目（令和４年度）はまだこどもたちとの探り合いのような状況で、進行役やアシスタントのアーティストやスタッフは、安心・安全な場づくり、信頼関係づくりに重点が置かれていた。振り返りの時間でも、こどもたちのその日のコンディションやケアについて言及されることが多かった。２年目（令和５年度）は、こどもたちとの関係の基盤ができ､ワークショップでアーティストたちからこどもたちに音楽的なアドバイスをする場面が目立つようになった。みんなで音楽を楽しむ場の空気や、バンドのような一体感が生まれ始めた。また、こどもがワークショップへの自分なりの関わり方を探し、こどもたちが他のこどもを誘って参加するな

ど、ワークショップ活動に主体的に関わろうとする態度が見られるようになった。参加者のモチベーションの度合いが合ってきた。

そして今年度は、これまで参加者だったこどもたちが中心となり、こどもスタッフとして未就学親子の参加者を受け入れる側になった。アーティストたちと一緒に参加者の前に立って演奏に参加し、ワークショップの雰囲気を親しみやすくし、参加者たちをやさしくリードする存在になっている。また、アーティストたちにとっては、演奏家として、こどもたちという新たな共演者との出会いになっていると思われる。このように演奏者と鑑賞者の垣根を交錯させながら音楽を創造していく試みが、鑑賞型公演に新たな観客開拓の余地を生み出し、また、演奏家の育成や音楽の創造環境の発展に貢献していくと予感させる。

2. にしのこまんぷく食堂

記録者	那木萌美
会場	堺市立人権ふれあいセンター、協和町第３公園、改良住宅西17棟
進行役・進行アシスタント	
井上嘉和さん（写真・造形）	
記録に関する補足説明	
進行役は、今年度、新しく参加した井上嘉和さん。本業はカメラマンで、おもに音楽ライブや舞台芸術の記録撮影をされている。今回は、アシスタントはおらず１名で実施。財団によれば、このダンボルワークショップは親子向けのものがほとんどで、こどものみが受講者になることはあまりない。	
１回目 （現地視察）	令和６年９月18日（水） 参加者は７名がワークショップ初参加。以前から通っているらしい５年生のこどもの団体が一番のり。学校の先生がワークショップを勧めてくれたのでしっかり時間を狙って来た。
２回目 （映像確認）	令和６年10月16日（水） 小学５年生が学級閉鎖になったことで、参加できなかったこどもたちがいた。急遽11月13日に、再度ワークショップを開催することになった。内容は１回目と同じだが、ただしその臨時回は、毎回ワークショップの最後に実施しているお面を被っての写真撮影はなしとなった。

にしのこまんぷく食堂　記録１回目：令和６年9月18日（水）

時間	15:00開始～17:00終了（計120分）		
参加者	こども	18人	7人がワークショップ初参加。
	食堂スタッフ	3人	谷岡裕喜さん、井上博幹さん、井上和希さん
	財団スタッフ	5人	石澤さん、川﨑さん、恒川さん、増田さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	5人	堺市立人権ふれあいセンター職員3人、堺市社協職員1人、堺市職員1人

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
14:50	こども5人		こども５人が来場。
	井上嘉和さん（以下、嘉和さん）	こどもたち	開始の声かけ。お面の土台の説明とグルーガンの注意事項、嘉和さんのつくった見本を見るように促す。
	たんにい、ひろき、かーくん（食堂スタッフ）	こどもたち	着席して自分の作品づくりを開始。
	Aさん、他	嘉和さん	（自分たちがモデルにできるかもしれない）ヒーローやクリーチャーの名前を、次々と口にする。パーツのつくり方を、形状も指定したうえで嘉和さんに直接質問する（ブラックパンサーの丸い耳、など）
15:00	Bさん、Cさん	嘉和さん	嘉和さんがすでにつくったパーツを使わせてもらえると知ると、早速もらいに行く。
15:05	嘉和さん	こどもたち	こどもが口にする既存キャラ（「スパイダーマン」など）を自身の知識からすぐ判別し、特徴的なパーツを自ら造成してあげる。
	嘉和さん	新たに来たこども３人	新たに来た子にだけ、改めて作業を説明する。 同じディズニーキャラクターをつくっている。パーツの形（再現度）はこどもごとに違う。
15:10	嘉和さん、石澤さん	こどもたち	今回のワークショップだけでなく次回にも分けて時間をかけてつくってよいことをアナウンスする。
	Dさん、Eさん、Fさん		「無理。みんなどうやってつくるん」とDさん。Eさんは髪の毛を付けようということをすぐ発想して手を動かしだした。グルーガンの使用に抵抗がない様子。Fさんは「カンニングするわ」とスマホで検索し始める。
15:15	たんにい	Gさん、Dさん	画像を検索してあげる。”見せる時間は◯秒ルール”をつくってカウントダウンしている。

	Aさん	記録者	Aさんはお面を頭に被ったまま少しずつパーツを貼り付けている。続いて、隣のこどものお面を持ち、貼り付ける作業をする間お面を支えてあげている。
	Gさん		Gさんは近寄って観察し、どうやったら再現できるか考えている。
15:20	Bさん、Cさん	嘉和さん	新しくもう1人こどもが参加したのをきっかけに、Bさん、Cさんが「もう1個（次の）つくっていい？」と嘉和さんに聞く。
	嘉和さん	Bさん、Cさん、こどもたち	嘉和さんから「1個の出来をもっとよくしていこう」とBさん、Cさんに返答し、全体に声かけをする。
15:30	嘉和さん	Bさん	具体的にパーツをつくって与え、貼る場所も伝える。Bさんはあまり気にかけていない。
	Eさん、Hさん		並んでもくもくと作業している。
15:35	こども3人		こども3人が新たに参加する。
	Iさん	他のこどもたち	パーツの向きなどアドバイスしあっている。
	Bさん、Cさん		２個目に突入。１個目よりも手が動いている。1個目のときと同じく、２人が同じキャラクターをつくっている。
	嘉和さん	Jさん、Kさん	新たに加わった2年生のJさんとKさんに、みんながすでにつくったものを見てみるよう嘉和さんが促す。
15:40	嘉和さん		見本として飾っていた自作の面を自ら被ってみせる。まねるこどもたち。Eさん、Gさん、Fさんと続く。
15:45	食堂スタッフ		間仕切りを取り払って部屋を拡大する。
	嘉和さん	全体	気を引き締めなおし、気をつけてグルーガンを使うように改めて注意を全体に促す。
	Jさん、Kさん		手が進まないまま2人で席にたたずんでいる。
	Fさん		Fさんはスマホを机におき、見本にしている。自分の作品と見比べて、奮闘している。
16:00	Lさん、Mさん		もくもくとLさん、Mさんの２人が並んで作業している。
	Dさん	大人	Dさんが大人に「マジックない？」と聞く。（マジックいいの？と別の子が言ったのを聞いて）Nさん「マジックありやろ？だってこれ自分のやで、人のんやったらあかんけど」。
	Nさん、Oさん		1人が犬、もう1人が猫をつくっている。示し合わせてペアにしている。
	Gさん、Dさん		かなり細かなパーツを付けている。

	Pさん		（Bさん､Cさんの机に遅れて参加し口論などもあったあとで）熱の入ってなさそうな態度だが､気が付くとパーツを重ねている。
	Jさん、Kさん		Jさん、Kさんは引き続き手が動いていない。
	Nさん	嘉和さん	Nさんは「できた、完成」と嘉和さんに口で伝えたうえで、面をかぶり、全身の振り付きでアピールする
16:10	Rさん		ダンボール紙で絆創膏をつくった。自分のグルーガンのやけどを手当している
	Dさん	嘉和さん	Dさんが、Rさんのつくった絆創膏を嘉和さんに贈る。
	Sさん		ずっと自分の机の付近にいたが、作業がひと段落して、見本を見にくる。
16:15	Iさん		Iさんは面をひと段落させて、武器をつくり始める。
	Jさん、Kさん	嘉和さん	JさんとKさんは入室後30分以上ほぼ手が進んでいなかったが､嘉和さんの机に行き､何かのパーツをつくってもらえないかお願いをしている。
	Nさん、Oさん		NさんとOさんは机を離れ､室内の別の場所でおやつを食べている
16:20	嘉和さん	全体	嘉和さんから「そろそろ仕上げをしよう」と声かけ。
	Tさん、Eさん		Tさんは、じわじわと黙々とつくっている。Eさんは一節だけ何かのうた「ミソラーソ」を口ずさんだ。
	嘉和さん	全体	嘉和さんから「できた人は写真を撮ってもええからね」と伝える(記録者注:撮る前提が伝わってなかったかもしれない)。
16:25	Nさん、Oさん		NさんとOさんは飽きているように見えるが､場にとどまっている。室内におり、外に出ない。
16:30	Nさん	大人たち	Nさんは嘉和さんが制作したお面の見本を被って、大人たちにからむ。後ろからそっと近づいて驚かそうとしたりする。
	Oさん		sOさんは見本を被って、ゆらゆら自由に踊っている。
16:40	こどもたち		席を立つ子が目立つようになる。
	Uさん		新たに加わったUさんは､すぐに手が動く。完成しているNさんの犬を真似てつくっている。
	川﨑さん	こども	川﨑さんをはじめ数名の方からこどもにアンケートの配布を開始。
	Bさん	ひろき	ひろきからBさんに「グルーガン借りていい？」と聞く。Bさん「ええよ、火傷せんように」。大人たちが笑う。

	こどもたち		自分の作品よりも、見本を被った状態で写真を撮ってほしい、という子が目につく。
	Jさん、Kさん		Jさん、Kさんの手が動いてきている。
16:50	嘉和さん	全体	嘉和さんから写真撮影を呼びかけ。スタジオブースへ誘導「(面に合わせて）不気味なポーズを取って」と声をかける。女児はポージングがかわいい子が多い。撮影が進むと、自分のものを積極的に被る子が増えてきた。
	Qさん		Qさんがアニメの曲を歌っている。周りも加わっていく。歌い続けている中で、半分くらいの子は引き続き手を動かしてつくっている
	Uさん		Uさんはつくりはしないけれども座ってたたずんでいる。
	食堂スタッフ	食堂だけに来た子へ	会場を覗いて驚いた子に食堂スタッフが「また来月来いや」と誘う。
	嘉和さん	全体	おわりの挨拶と、次回に向けた説明をする。

◉事後の振り返りの記録

こども食堂スタッフ

- こどもたちは手を動かしたものづくりが好きなようだ。集中していた。
- 嘉和さんのこどもへの対応、例えば1時間経過して集中力が切れてきた時の声かけや、こどもにパーツをつくってあげる提案などがよかった。
- 今回のワークショップは、チラシから得られる情報も制作する物のイメージ（お面）も、ゴールがわかりやすく、こどもはとっつきやすかったようだ。
- 既存のキャラクターをつくった子が半分くらい。創造性や独創性の面で、嘉和さんの作成した見本に近づけるよう粘れない。つくる過程や体験自体が大切だとは思うが、少し気になった。素材の使い方の紹介やパーツの準備などをすることで、こどもを促せないだろうか。
- 安全面の課題。グルーガンが熱かったり難しかったりした。もしそれたために足が遠のいたら残念。

財団スタッフ

- こどもから嘉和さんへの相談が気軽にできる関係性が見られた。「頼れるお兄さん」という感じでその場にいてくれた。
- 男子に比べ女子が興味を持つか心配だったが、取り組めた。2年前のダンスよりも、ここ2年間での物づくりの方が好きなのかもしれない。
- ワークショップとしての方向性や工夫のことは、嘉和さんに相談しつつ次回に向けて工夫したい。

◉記録者による全体の所感

なかなか手が動かない子も、作業に飽きた子も、会場内にたたずんでいるというのが印象的だった。それほどこの場が安心できる空間だということなのかなと感じた。進行役からこどもへの声かけに余分な緊張感はなく、また、こども側のフレンドリーさもあり、「気軽に大人に相談するのが当たり前」という雰囲気だった。これはそもそもは、食堂スタッフの積み重ねてきた時間の賜物であり、また、財団スタッフの数年の関係とその他の事業運営経験の力量、人権センターの地域へのなじみ具合もそこに重なっているだろう。

こどもにいろんな体験をさせるという目的を食堂が明確にもっており、それに呼応した企画だと感じた。手を動かしてものをつくる体験ができ、作業の終着地点や経路が明確で、また、こどもが距離感をとりやすい余白がある（1回きり出席する、お面を被るだけ、撮影を見るだけ、など）。

アーティストの作品には、お面という限られた面積に対して粘り強く時間をかけて取り組むことで高みに近づくという特徴があった。その点は、大部分のこどもにとって難しかった（あるいはこどもに事前に伝わっていなかった）ようだ。しかしながら、見本に近づかないことでものづくり体験の魅力が半減するというほどの問題ではなかった。

ものづくり体験の面でいえば、造形の才能を発揮する子の作品の中には美術にふだん親しんでいるこちらでも驚くほどのものあり、また本人も作品に誇りを感じていたようで、このような機会が身近あることの意義を感じ、記録者が励まされた。

にしのこまんぷく食堂　記録２回目：令和６年10月16日（水）

時間	15:00開始～17:20終了（計140分）		
参加者	こども	18人	
	食堂スタッフ	3人	谷岡裕喜さん、井上博幹さん、井上和希さん
	財団スタッフ	5人	石澤さん、川﨑さん、恒川さん、増田さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	4人	こどもの親1人、堺市立人権ふれあいセンター職員2人、新聞記者1人

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
15:00	こどもたち		A～Fさんの６人がすでに着席。６人のうち、おそらく５人が２度目の参加。
	会場		机と道具の配置が前回から変わった。材料段ボールが、各自の作業机の上でなく、材料置き場にまとめられている。前回つくったこどもの作品も、机の上に揃えて並べられている
	嘉和さん	こどもたち	開始の声掛け。改めてのつくり方の説明と、ホットボンドの使い方の指導。
15:04	親子連れ		親子連れの参加者が来場。前回はなかった、幼児と親の組み合わせ。こどもは明日で４歳を迎える。嘉和さんから促されて見本（嘉和さんの作品）を観察する。
	Gさん		来場。おそらく前回はいなかった子。この時点で参加者9人（うち親１人）
15:06	Aさん	こどもB	はじめて参加したBさん（Aさんの隣に着席）に、材料を取り付ける方法を教えているらしい。当人はお面に追加造作せず武器に着手している。一方で、同じ机のGさんにはとくに干渉しない。
15:08	Gさん		ついに手が動く。はさみで材料を切った。
15:11	Cさん	嘉和さん	Cさんが「先生助けてー」と嘉和さんを大きな声で呼ぶ。助言を受けたあとは、自作パーツを嘉和さんに自慢する。
15:15	Bさん		Bさんが歌いはじめる。
15:16	Hさん		Hさん来場。前回の続きでなく新しいものをつくる気で来た様子。石澤さんに画像検索をねだる。
15:17	女児		女児が「今日は暑いにおいがする」「動物のにおいがする」と発言。周りの子も「暑い」と言っている。
	Cさん		常に誰か大人を自分のそばに呼び、手伝ってもらったり、アイディアを披露したりする。着々と造作をすすめている。財団スタッフのことも「先生～」と呼ぶ。Aさんの隣で静かに

			作業をしている。遠慮なく大人の手を借りたり会話したりしているが、落ち着いている。
	Eさん、Fさん		EさんとFさんは、手はあまり動かず席でじゃれ合っているが、楽しそう。嘉和さんにパーツを提案されても採用しない。でも作業しないわけではない。
15:20	Bさん		Bさんはお面よりも盾と剣の作業が進んでいる。
15:25	Aさん、Bさん、Gさん	嘉和さん	Aさん、Bさん、Gさんの３人ができた武器を嘉和さんにアピール。
	嘉和さん	Aさん、Bさん、Gさん	嘉和さんから「ほんならこの武器を入れる筒みたいなんつくり」と提案。具体的にアイテムをつくってあげるため、嘉和さん席にもどって作業。
15:29	親子連れの幼児		保護者がお面をつくるかたわら、幼児は段ボールでミニカーの駐車場をつくっていた。
15:31	たんにい	新たに来たこどもIさん、Jさん	嘉和さんを紹介。この２名は前回は参加していない
15:32	Iさん、Jさん		Iさん、Jさん見本を見に席を立つ。川﨑さんがケア。ほどなくして席に戻る。各自スマホで検索しだす。そこに財団スタッフが、ワークショップ初参加かどうか聞きに話しかけて、作業内容を言葉でフォローする。
	たんにい	嘉和さん	たんにいが嘉和さんに「Hさんは自分の作品を今度USJへかぶっていくつもりだ」とHさんのいる前で伝える。
15:35	嘉和さん		嘉和さんが自らお面をかぶって、こどもに話しかけに回る。
	Fさん	かーくん	昼間の算数のテストのことを聞いてもらっている。
	男児３人		武器を使ったあそびにシフトしてしまいそう。だが、完全にお面づくりを無視しているわけではない。嘉和さんも、お面を深めるように促す。
15:39	石澤さん	Iさん、Jさん	IさんとJさんの手が進まないと見て、財団スタッフが技法面からフォロー。見本の面の前に連れていき、加工方法を３つくらい説明。
15:42	親子連れの親	Iさん、Jさん	親子連れの親御さんが、向かいに座っている２名に対して、何をつくるのか質問する。「進撃の巨人のエレン」「すごいな。難しない？」。
15:42	Eさん、他	かーくん	Eさんたちが工作とは関係のないクイズをかーくんに出している。
15:50	Bさん	常盤さん	Bさんが次回の実施内容を常盤さんに質問する。
15:51	Cさん		歌を口ずさんでいる。

15:52	親子のいる机の４人		いつの間にか全員椅子から立って作業している。
	Kさん	たんにい	Kさんが来場。たんにいたちの所にすぐ行く。たんにいが「待ってました」と迎える。
	Cさん	石澤さん	こどもBのそばにいた石澤さんを、自分の席を立って呼びに行く「先生見てーかわいい」。石澤さんが「待って、今Bさんのを見てる」と言うと、Bさんの作品にリアクションする。その後、石澤さんを自分の席に連れてゆき感想を聞き出している。
15:55	石澤さん	Kさん	石澤さんがKさんに話しかける。以前のダンスのときのエピソードを持ち出すなどして、コミュニケーションをしている。
15:57	こどもたち		全体が少し落ち着いてきた印象。自分のやりたいことを一度ひととおりやったのか。IさんとJさんは『進撃の巨人』をモチーフにゆっくり作業を進めている。
16:00	L〜Oさん		前回は参加していないL〜Oさんの４人が来場。うち１人は５才。作業を開始。
16:04	Kさん		Kさんは最初の１本の段ボールをどこにつけるかで長く悩んでいる。席を立ち他のこどもたちのところに行く。座っているだけでちゃんばらには参加しない。ほどなくして自席に戻り、ついにはさみで１本カットした。それをどこに付けるか引き続き悩んで、少しずつつくっている。
16:06	こどもたち		後列のこどもは作業を止めて武器で遊ぶ子が目立つようになる。
16:29	Dさん、Cさん	嘉和さん	DさんとCさんが嘉和さんの名札をつくってあげる。
16:30	L〜Oさん		後から来場した４人の造作がずんずん進んでいる。石澤さんがまめに作業をフォローしている。親子連れの親のほうも彼女たちに声をかけている。
16:32	Pさん、Qさん		PさんとQさんが来場。嘉和さんより説明をうけ作業を開始。なお、このあと更に２人来るものの、残り時間が少ないため食堂スタッフが参加を断る。
16:40	Lさん		Lさんが作品をアピール。「メイクばちばち孔雀」。
16:46	嘉和さん	こどもたち	嘉和さんが「みんなーあと15分やで」と呼びかける。こどもは全体的に「ぎょえー」と大きな声で反応する。
16:50	嘉和さん	Aさん、Bさん、Cさん	こどもたちの机で武器づくりをする。
16:56	嘉和さん		嘉和さんから、このあとの写真撮影の声かけ。新聞取材が入っている旨も伝えた。

17:00	嘉和さん		終わる準備の声かけ。IさんとJさんは撮影を待たずすっと帰った様子。Eさんたちはかーくんのお面に食いついている。
17:02	嘉和さん	こどもたち	写真撮影開始。
17:14			撮影終了。こどもたちはおのおの解散。

◉記録者による全体の所感

前回も参加しているこどもは5人くらいだと思う。参加が2度目ということが、取り組みやすさや作品の仕上がりに影響しているこどもはあまりいないようだ。2回開催することで創作体験が深まるというよりは、同程度の体験をできた人数が増える。純粋によいことだと思う。

財団スタッフのなかでもとくに石澤さんの配慮が目立った。数年見守っているからこそできるであろう、こどもへの細やかな声かけがあった。また、参加者の人数的に、嘉和さんがカバーしきれない範囲の指示をおこなっていた。場合によっては嘉和さんのアシスタント（財団スタッフではなく）が必要かもしれないが、参加人数が不定であるため、財団スタッフが嘉和さんから事前にレクチャーを受けてフォローする、いまのやり方が現実的かと考える。

3. PROJET CONSTRUIR KODOMOSHOKUDO

記録者	マブチユウミ
会場	自宅民家、大阪いずみ市民生活協同組合本部、サンスクエア堺
進行役・進行アシスタント	
進行役：大熊ねこ（通称パンダさん） 進行アシスタント：はせなかりえ（通称りえさん）、池川貴清（通称池ちゃん）	
記録に関する補足説明	
進行役・アシスタント共に昨年度から引き続きのメンバー。参加者の顔ぶれもほぼ昨年と変わらないため顔馴染みである。参加者には親子、きょうだい、いとこなど、親戚関係がある子も多い。参加してくれたお母さんたちはほぼポルトガル語話者。	
1回目 （現地視察）	令和6年9月28日（土） 初の食堂とは別の会場での開催であり、本来こども食堂近くにある建物でワークショップ実施予定だったが、トラブルにより急遽3日前に会場変更が行われた。 食堂の中心的なメンバーで、昨年度のワークショップもすべて参加してくれていた姉妹が引越しにより食堂にあまり通えていなかったが、この回で久々に参加。また、食堂には長く通っているが、これまでワークショップには参加しなかったこどもが新しくこの回から参加。
2回目 （映像確認）	令和6年10月19日（土） このワークショップの実施前にPROJETO CONSTRUIR主催の文化祭の舞台があり進行役のアーティストたちも観に行っている。撮影は事前の打ち合わせから開始されており、開始予定時刻を迎える前から参加者は集合していた。

PROJET CONSTRUIR　記録１回目：令和６年9月28日（水）

時間	11:00開始〜12:00終了（計60分）		
参加者	こども	8人	５歳くらいから大学生まで。
	食堂スタッフ	6人	田中ルジアみやさん、他スタッフ４人
	財団スタッフ	3人	石澤さん、恒川さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	0人	

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
11:00	全員		自然に円になっていく
11:02	パンダさん	参加者	パンダさんから「久しぶりの人も初めましての人もこんにちは。よろしくお願いします」とあいさつする。 最年少のAさんが「パンダさん、知ってる。みんな知ってる！」と口を挟み、みんなに話しかける。
11:04			パンダさんから「じゃあとりあえずいつもの名前とポーズやろうか」と説明。今日呼ばれたい名前を言ってマイポーズを示し、そのあとそのポーズをしながらその人の名前をみんなで呼ぶ。パンダさんがリードして全員でまわしていく。
11:15			パンダ「去年いた人はやったことあると思います！」。 代表者が前に出て動き、その動きをみんなが鏡のように真似する「ミラー」の説明。途中激しい動きも。
	りえさん、パンダさん	参加者	りえさん「大人は無理しないように！笑」とスタッフやお母さんたちに声をかける。盛り上がりながらも、みんなパンダさんの動きに集中していてグッと静かになる瞬間もある。
	Aさんのお母さん	Aさん	おどけてはしゃいでいたAくんがお母さんに隣の部屋へ連れて行かれる。
11:17	大人たち		大人たちは疲れて壁際に座り始める。ワークショップの様子を見ながらおしゃべりしたり、面白いことが起こるとツッコミを入れたりする。このあとはできる動きのときは入って、激しい動きのときは無理だと笑いながら座りに行くなどワークに出入りしている
	Aさん		Aさん、戻ってくる
	パンダさん	池ちゃん	パンダさんが次のリーダーに池ちゃんを指定する。（昨年度の「ミラー」の際、池ちゃんのやった動きをそのあとのリーダーたちが取り入れるといった流れが起きて大きな盛り上がりを見せた。去年のワークショップの思い出というとそのことを話す人も多いほどみんな覚えている）

	池ちゃん	参加者	日常的な動作のような動きが多い。みんなが池ちゃんにツッコミながら進んでいく。ただなんとなく左右の移動だけコピーしている子もいれば、完璧に細かい動作をコピーしている子もいる。
	パンダさん	参加者	池ちゃんの動き終了。パンダさんが何をしていたか言葉でインタビューする。
11:20	Aさん、Bさん		パンダさん「リーダーやりたい人！」。Aが名乗り出る。 Aさんが転げ回るなどの動きをする。Aさんの姉のBさんはやらずに座っていたが、周りも慣れていてとくにみんな気にしていない。Aさんの動き終了。
	パンダさん	Aさん	パンダさん「ちゃんとみんなのことを見てやってくれたからやりやすかった」。進行アシスタントも同意する。
11:22	Aさん	Cさん	Aさんが次のリーダーを選ぶ流れになり、最年長のCさんを選ぶ。
	Cさん	参加者	Cさんは「できなかったらやらないでください」と最初に声をかけると、Cさんの親のDさんが「じゃあ すわります(笑)」と答える。大人たちは後ろの方で座り始める。Cさんはパンチや側転などのアクロバットな動き。
	パンダさん、Cさん	参加者	パンダさん「はい、OK!」と声をかけるもみんなが中々やめない。Cさんも「もういいですよ！笑」と言うがみんながそれも真似する。前列にいた池ちゃんが「終わってる、これ!?」とまわりを見渡す。同じく前列にいたパンダさんも「気がついたら大人が座ってる！(笑)」とふりかえって笑う。
	パンダさん	参加者	Cの動き終了。自然と円に戻りながら、パンダさんが「ミラー、思い出しましたか？」「この次のワークも”マネ”するのでやってみよう」と言う。
11:25	進行役、アシスタント	参加者	パンダさん、りえさん、池ちゃん、クミコ（財団職員）でデモンストレーション。４～５人で菱形か五角形になる（「ダイヤモンドダンス」。先頭（みんなの向いてる方向の一番前にいる人）の人の動きを真似する→先頭の人が動きながら方向転換する→先頭の人が変わる→新しい先頭の人の真似をみんながする→くりかえし）。 周りの人と４～５人グループをつくる。こどもと大人の5人組、こどもと大人の５人組、大人だけの４人組、計３チームができる。 音楽つきでやってみる。パンダさんが手元で音楽を変える。映画音楽、アップテンポなディスコ、邦楽…としばらくすると音楽が変わっていく。
11:40	パンダさん、りえさん		休憩。「何もやらずこっち向いてくる！みたいなのでも盛り上がるしね」とパンダさん、りえさんが話す。
11:43	パンダさん	参加者	パンダさんからやることの説明。４人一組のチームごとに部屋全体つかってダイヤモンドダンス。

	参加者		最年長のCさん、初参加の10代のEさん、小学校低学年のFさん、めだだか（財団職員）の４人が並ぶと、パンダさんによって音楽（探偵アニメのテーマソング）が鳴らされる。音楽の影響を受けてハードボイルドな振る舞いに。Bさんが観客でありながら動きを真似している。 音楽が止められてパフォーマンス終了。りえさん「ドラマを見ていた気分」パンダさん「途中で（動きを生むために）言葉を投げかけようかと思ったけど、やらずにそのままいったね」。
	参加者		最年少のAさん、昨年から参加している10代のGさん、小学校低学年のHさん、クミコの４人が位置につくとパンダさんによって映画の感動的な歌が流される。Aさんはやることを理解はしているがまだ幼いのでままならないこともある。GさんとHさんは恥ずかしがってどうしていいかわからなくなり、自分がリーダーのターンがくるとすぐ方向転換してしまう。 CさんとFさんが「意気地なし！」「そこ４人チームちゃうんか！」などと野次を飛ばしたが(CとFとGは親戚)、りえさんが「困ったらすぐ向きを変えてもいいよ！」とフォローする。 音楽が止められてパフォーマンス終了。パンダさん「困ったら全然変わってもいいねん。誰かのマネしとき」とコメント。
	参加者		昨年から参加している10代のIさんとJさん、りえさん、池ちゃんの4人が位置につくとパンダさんによって壮大でスリリングなミュージカル音楽が流される。IさんとJさんも恥ずかしくてぎこちなく、だんだんみんなよくわからなくなってプチパニックになりつつもやりきる。 音楽が止められてパフォーマンス終了。池ちゃん「バグ発生した！(笑)」パンダさん「Iさん、前向けへんかったおもろ〜」 Cさん「Gさんよりもおどっとった(笑)」（GさんとIさんは姉妹）など口々に話し盛り上がる。
11:55	参加者		もとの円に戻る。パンダさん「みんなから感想聞かせてもらおうかな」こどもたちはみんな「楽しかったです！」食堂スタッフや親御さん「すばらしく独創的でした。１時間からだを動かした。一人ひとりの個性が引き出されててすごかった。Aさん、大活躍」「老体に鞭を打った(笑)。ごはんの前に動けてよかった」「（ポルトガルからの翻訳）こどもたちがしたことのないことをして表現していて、ダンスでコミュニケーションしていてよかった」。
12:00			パンダさん「あっという間の1時間だった。誰かをマネするだけでダンスになるし、繋げるとホンマに４人のダンスになる。困ったらこんなことでも発表会に使えると思う。意外とこうやってみるとひとつの形になる」りえさん「前に出ていること怖がらずにいてほしい」池ちゃん「ルールにとらわれがちなんかな。自分がこうしたいもあるけどみんなで合わせることでいいことも」。

			パンダさんから「ルールからはみ出すのも発表会」と締めてワークショップが終了。このあと発表会の演目を披露してくれる。

◉事後の振り返りの記録

アーティスト

- とにかく楽しくやれた。言葉のことで「伝わるかな」など全く考えずにやった。普段やっているワークショップのようでもあるけど、本当に一緒に遊ぶようなワークショップになってきたと思う。みんなが受けいれてここで何かしようとしてくれているので引っ張っていかなくていい。ダイヤモンドダンスは失敗もなく楽しくからだ動かせた。時間としては楽しく何かは残る。発表会に繋がるかはわからないがワークショップのひとつの段階としても成立したのではないか。
- アイドリング状態というか、一緒に進めていく感じで、誰かが促したり引っ張ったりすることもなく、よかった。集団でやると志の高い人が引っ張ったりルールにとらわれたり結局どっちつかずになりやすいと思う。発表会が前提だと構えが変わるだろうけれども、同じ目線で一緒に上がっていくのがよいと思う。
- 正解のないものを人前でやる怖さはどの世代でもある。それを越えてやってくれるのがよかった。ルールが崩れても笑って許容できるのがよい。安全な場だと思ってくれたかもしれない。言葉のことはすっかり忘れていた。（最年少の）Aさんもみんなが考えしてくれて、どれだけ長くやってもなんとかなった。発表会は多少の縛りがあるだろうけれども、みんなが楽しめたらいいと思う。
- 前回のふりかえりで発表会の今の発表会に向けた進捗を聞き、「ダンスをどうするか悩んでいる」と聞いてダイヤモンドダンスをやろうと思った。ダイヤモンドダンスは、リーダーになっても困ったり飽きたりしたら誰かに渡していい。すごくよいゲーム。この場を動き続けられる。自分以外の誰かと居続ける意識があるのがいい。みんなにフィットしていると思った。

こども食堂スタッフ

- 発表会にも繋がると思う。普段自分から動くのが苦手な子も、本当は何かやりたいけどできないという子がいて、今日のダイヤモンドダンスでは最後にできたのがすごい。ダンスでは、大人のグループもすばらしかった。Aさんは「今日はパンダさんが来るから」と幼稚園を欠席した。幼稚園では動きすぎていつもはじっこにいたけど、今日はいきいきしていた。みんながそのように成長していて、続けてよかった。発表会は、当日だけではなく、ずっとやっていることの続きだ。

財団スタッフ

- 自分自身がいつも楽しい。こどものよいところは、まず肯定することから始められること。パンダさんが、ルールとは違っていても「こうだね、そうだね」と受け入れる態度だった。大事なことにワークショップの中で気づく。恥ずかしくても1人1人ががんばるダイヤモンドダンスは、どんどん変わっていくのもかっこよくて面白い。マネしても、すぐ渡しても、自分がすごく頑張ってもよい。Aさんのこと見ていてアイドルみたいだと思った。Aさんがアイドルでいられる空気や場があってよかった。「いいね、面白いね」の積み重ねで場ができていると思った。
- 今日のAさんは本当に周りが見えていた。自分の意見を聞いてもらえるという実感あるように思えた。目立つことで「聞いて、聞いて」と言わなくてもいいように見えた。

◉記録者による全体の所感

会場がいつものこども食堂ではなく広い鏡のある練習室のようなところだったので、存分に身体を動かせたと見受けられ、参加者も体を動かすマインドセットができていたように思う。身体表現は挑戦するのが難しい手法だと思うが、安心して人前で発表できる信頼感や友情がよりいっそう深まっているように感じた。

今回の内容はダンス的な要素が強かった。これまでゲーム性の強いワークが多かったが、今回は表現の要素が強かったように思う。自分を表現すること、勇気をもって身体を動かしてみること、そしてそれを他者に目撃してもらうことなど、表現の段階が進んだ回というような印象を受けた。

PROJET CONSTRUIR　記録２回目：令和６年10月19日（土）

時間	10:50開始〜12:20終了（計110分）		
参加者	こども	6人	未就学児から大学生まで。
	食堂スタッフ	2人	田中ルジアみやさん、みのりさん
	財団スタッフ	3人	石澤さん、恒川さん、常盤さん
	その他の参加・視察者	2人	児童の母親、元財団スタッフ1人

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした
10:50	全員		雑談をしたりこどもが遊んでいたりしながら円になって待っている。事前打ち合わせをしようとしたら、みんなが集まってきてしまった模様。パンダさん「ワークショップは11時からなのでそれまで打ち合わせをするんやけど、みんないるから、みんなと一緒にしよう」。 その間、円の真ん中で最年少のAさんがブロックでつくったおもちゃをつかっておどけている。パンダさんが「迫真の演技や」と突っ込んだりする。年上のこどもたちが名前を呼んで円に戻そうとする。ルジアさんがポルトガル語で語りかけてAさんは円に戻る。
10:54	くるみ、パンダさん、りえさん	参加者	財団スタッフであるくるみが「打ち合わせを始めたいと思います」と全体に声をかける。ルジアさんがポルトガル語に翻訳する。 くるみが「今日は何をやるんですか？」とみんなを代表するようなかたちでパンダさんに問いかける。「今日は今年の最後なので、今年４回やってきてどうだったか聞きたいですね」。ルジアさんが翻訳をする。このあともポルトガル語しかわからないお母さんのために随時翻訳する。 りえさんがみんなに「やってみたいことはないですか」と声かけるがそれぞれ近くの人とおしゃべりしている。ファシリテーターと財団スタッフで打ち合わせし、みんなが集まって準備できているので、少し早めに始めることに。
10:59	パンダさん、りえさん、池ちゃん	Ｂさん、Ｃさん、Ｄさん、ルジアさん	いつも通り名前を言い合うことから始めようとしていたが、パンダさんが「何か聞きたいことある？」とみんなに言う。りえさん「秋といえば？」池ちゃん「最近した一番秋っぽいことは？」と言うと、小学校高学年くらいのBさんが「もみじ！」と答える。そのあとCさんが「メープルソース」と答える。発音がすこし日本語と違ったので聞き返しながら「メープルソースね！」となる。 その後もBさんが「金木犀」「かぼちゃ」「ハロウィン」などと答えてパンダさんたちがそれに反応していく。池ちゃんが「金木犀はブラジルにもあるんですか？」と聞くとルジアさんが「ないよ」と答えてお母さんたちがうなずく。

	全員		その後もBさんがパンダさんに思いつくことを言ったり、パンダさんがルジアさんや最年長の大学生Dさんにも声をかけたり、それぞれ隣の人と話したり、ブラジルとの季節の違いを話したりなど「秋といえば」の話題でおしゃべりが盛り上がっている。
	みのりさん	Eさん	食堂スタッフのみのりさんが「パンダさん、Eさんが学校で秋の俳句をつくって入賞したそうです」と離れたところから声をかけ、一同拍手する。発表したくないというEさんにパンダさんが「季語だけ教えて」と言うと「もみじ」と答える。 もみじから派生した話題が円のあちらこちらで話されている。 しばらくザワザワしている。
	パンダさん	参加者	Bさんが周りを巻き込んではじめた焼き芋じゃんけんが発端になってみんながいろんな手遊びをしている。すこし落ち着いたところでパンダさんが「じゃあずっと座っているから立とうか」と声をかけて全員立つ。
11:20	パンダさん	参加者	パンダさん「じゃあ名前を呼ぶゲームをしよう」。自分の名前を言って誰かの名前を言う。初めは探り探りやっているが、小学生のFさんが、相手がつけた敬称を自分で名前を言うときにも引き継ぐという面白さを発見。そのうちみのりさん発信で「様」をつけてみるなど敬称で遊び出す。周りも「殿」をすすめたりして、どんどん発展していく。
11:26	パンダさん	参加者	パンダさん「じゃあこれに動きをつけていきます」。例えば「パンダさん、くるみ」と言ったらパンダさんはくるみのほうに動き出す。くるみはパンダさんが到着する前に「くるみ、〇〇」と次の人を指定して歩き出す。「じゃあゆっくりやってみるよ」とパンダさんが説明して試しにやってみる。 恥ずかしがり屋の子はなかなか声を出せずにその人の前に行ったり、途中小競り合いしたりしながら、大人たちが軌道修正し進んでいく。
	みのりさん、ルジアさん、池ちゃん	参加者	途中みのりさんが「セニョーラくるみ」などとポルトガル語を挟み始める。その後もルジアさんがブラジル版の「どれにしようかな」で次の人を選ぶような場面も。ルジアさんがつかったポルトガル語の敬称を真似て池ちゃんも使う。
	いちご	Bさん、パンダさん、りえさん	いちごが「めんどくさい」と座り込んでいるBさんの前に立って立つのを待っている様子を見て、パンダさんが「『おうちに泊めて』みたい。『おうちに泊めて』ってやったっけ？」とりえさんに聞くと「やってない」。「できるかな」と言いつつやってみることに。
11:32	パンダさん	参加者	パンダさん「まずは練習してみよう」。目が合った人と歩いて場所を交換するというのを一斉にやってみる。

11:34	パンダさん（以下の「誰が」の欄は円の中心人物を示す）	参加者	まずはパンダさんが『おうちに泊めて』をデモンストレーション。１人円の内部に立つ。円にいる人に「おうちに泊めてくれない？」と声をかける。声をかけられた人は「隣に聞いて」と答える。円の中にいる人が「おうちに泊めて」と尋ねている間、その他の人は目が合った人と場所を交換することができる。もし中の人が、交換していることに気づいたら、交換が遂行される前に空いた空間に入ると中にいる人が交代する。「みんな、ぶつかったり転んだりしないように」と声がけをしてデモンストレーションから繋げて開始。
11:35	りえさん		りえさんが円の内部に立つ。おそるおそるBさんとめだだかが目を合わせて最初に場所を交換しようとする。いざ動き出そうとすると、めざとくりえさんが振り返り動けない。そのあともう一度挑戦し場所の交換に成功。 「おうちに泊めて」の返答も「やだよ」などバリエーションが増えてくる。
	いちご		いちごが誰から声をかけようか迷っていたらこどもたちが「池ちゃん、池ちゃん！」と勧める。小学校低学年頃のEさんがお母さんのCさんと交換し成功。そのあと隣同士のEさんとみのりさん、離れていたりえさんと池ちゃんが同時に交換。りえさんがいた場所にいちごが入り、池ちゃんが中心へ。拍手が起こる。池ちゃん「迂闊やったな〜」。
	池ちゃん		Bさん、Eさん、Fさんがこっそり相談後、Fさんを挟んでBさんとEさんが交換。パンダさんが「お〜いいね」と声かける。Eさんがダンスのような動きで池ちゃんを挑発する。池ちゃんの背後でルジアさんとCさんが対角線上で交換に成功。「すごーい」と拍手が起こる。池ちゃん「なんやこれ、誰のためにもなってないぞ！」と言い笑いが起こる。徐々にみんなが足音などで交換するフリもするようになり、池ちゃんも牽制で振り返るように。隣同士のDさんとめだだかが目配せして静かに交換。全く気づかれない。今度はDさんを挟んでCさんとめだだかが交換するが、Cさんがいたところに池ちゃんが入りめだだかが中心へ。
	めだだか		池ちゃんのターンがやっと終わったことに盛り上がる。Fさんとみのりさんが対角線上で大胆に交換するがめだだかは交換後に気づく。その後牽制で振り返っているが、反応が遅れて交換が成功していく。兄弟のDさんとFさんが大胆に交換するがめだだかは気づかず、思わずめだだかの目の前にいたりえさんが指差して教える。一同大笑い。 だんだん「おうちに泊めて」の声が悲しそうに。注意深くなり牽制も増える。円にいるみんなも声や動きで揺動する。笑いながら「かわいそうに」という声も上がる。 Bさんがめだだかに場所を譲るようにひとりでに歩き出し、中心に出る。りえさん「B、男前！」などと声が上がり「おお〜」と拍手が起こる。

11:38	Bさん		最初にCさんが一歩前に出てGさんに声をかけてなかなか動けていなかった恥ずかしがり屋のGさんを誘い、交換に成功。Bさんは気づかない。パンダさん「上手やなあ」。Eさんとパンダさんも交換。Gさんとルジアさんも大胆にゆっくり交換し、Bさんは気づくが思わず見届けてしまう。尋ねるのを再開するが「おうち…おい！」と振り返って実際には何もしていなかったFさんを牽制。一同爆笑。BさんとFさんが続けて小競り合いしていると母親であるCさんがポルトガル語でBさんに声がけし、Bさんもポルトガル語で返答する。 その後尋ねるのを再開し、円にいる人もふざけたりBさんも毒舌で返したりしながら進んでいくが、Cさんがすこし身動きした隙にBさんがCさんの場所に入ってしまう。一同笑い、「強制!?」などとツッコむ。
11:40	Cさん		Cさんが「おうちに泊めて」と尋ねていくと、Bさんの番になったときに「さっきごめんな」と言われ「はい」と返す（BさんとCさんは親子）。周りが笑う。Eさんがめだだかと交換。Cさんは俊敏に動くが間に合わない。歓声が上がる。Fさんと池ちゃんも交換。Cさんが尋ねながら振り返り、宇宙人とみのりさんの交換にすぐ気づく。宇宙人が中心に出される。「おお〜」「素晴らしい」と歓声が上がる。
11:41	宇宙人、池ちゃん		序盤に静かに同時多発的に３組が入り乱れて交換が行われる。向かい合っていた池ちゃんとりえさんが交換した際に、池ちゃんの右手側にいたEさんがりえさんがいた場所になぜか移動する。目の前が空いたので宇宙人は円に入るが池ちゃんが中心に出されてしまう。みんな「あれ？」「え？」と言いながら爆笑する。池ちゃんも戸惑った様子を見せているが、Bさんが「はい、いってらっしゃい」と中心にむかって背を押す。
11:42	池ちゃん		はじめに池ちゃんがEさんに「おうちに泊めて！」と言い笑いが起きる。隣同士のBさんとEさんが交換し、横目で池ちゃんが気づくが間に合わない。さらに２人がもう一度交換し、池ちゃんが近づいてくるが間に合わない。「疑心暗鬼になってる」とみんな笑う。その後も BさんとEさんだけでなく周りの数人が何度も交換するが全く入る隙がなく、池ちゃん「もうこのへんは蜃気楼」と。「おうちに泊めて」と言われたFさんが「いいよ、３秒だけどうぞ」と言ったのを聞き、両脇のCさんとルジアさんが「いけいけ」と笑いながらFさんを中心に押し出して、池ちゃんを円に入れる。
11:43	Fさん		Fさんが「おうちに泊めて」を言わずに黙って１人ずつの前に立っていく。Dさん（Fさんの兄）が「言えや」とツッコみ、みのりさんも「なんですか」と言い笑いが起きる。大人たちが「要件を言わないと」「新聞ならお断りです」などと言い、Cさんは「ポイントはね」と言い自分の番のときに編み出した態勢を伝授する。その後Gさんとみのりさんの交換に間に合い、Gさんと交代。Fさんは「よっしゃあ」と叫んでいる。

			Cさんが「だいじょうぶ？」とGさんに何気なく声をかけている。
11:44	Gさん		何度も交換がおこなわれるがGさんはなかなか気づかず反応が遅れる。Cさんは交換が起こっているのを指差して教えたりする。みのりさんも出てきて「もうすこし離れたほうがいいよ」とFさんを後ろに引っ張ってあげる（円の人たちとの距離が近くて視界が狭かった）。みんなが手助けする様子に笑いが起きる。その後も周りが時々手助けするが、ついにDさんとFさんの交換の際に自分で気づいて円に戻る。Fさんが中心へ。
11:46	Fさん		Fさんが後ろに牽制をいれながら尋ねていく。隣同士の交換が一度あるが、背後で動いたみのりさんとBさんにすぐに気づき、円へ。一瞬みのりさんのほうが速く見えたが、りえさんがFさんの足が先に入っていることを指摘し、「おお〜」と声が上がる。
11:47	みのりさん		みのりさんが中心に立つが「なんだっけ？」と言い、みんなが一斉に「おうちに泊めて」と教える。交換が起こるがなかなか反応できず「難しいこれ」「背中に目をつけてないといけない」と気づく。大人たちが「そう！」と同意する。Aさんが別の部屋から戻ってきてCさんのところへ行く。CさんがAさんにやっていることを説明している。Cさんの番がきて、みのりさんがしゃがんでAさんに「おうちに泊めてくれるかな？」と聞くとAさんが首を振って応えて笑いが起きる。
	Dさん		Dさんは最年長でみんなが甘えやすく、こどもたちがDさんの番になったことをいじったり、ぶっきらぼうに返事したりしている。宇宙人とパンダさんの交換は少し息が合わずすぐに円に戻る。
11:49	パンダさん		パンダさんに交代するとBさんが「後ろ！」と声がけし、DさんやFさんが「めっちゃ売るやん」とツッコむ。くるみとCさんの交換でパンダさんが円に戻る。
	くるみさん		尋ね始めるが「おうちに…?」となり周りが口々に「おうちに泊めて」と教える。「壊れた？」などとツッコまれている間に、くるみの目の前で交換が起こる。「すごい！」と声が上がる。惜しいときもあるが、交換になかなか気づけないまま進む。同時に２組交換が起こり混線する。宇宙人と池ちゃんが体当たりし、その隙にくるみが円に戻る。はじかれた宇宙人が縁の中心に転げ出し、笑いが起きる。
	宇宙人		最初に起こったBさんといちごの交換で宇宙人がすぐに円に戻る。いちごがスライディングするが間に合わない。勢いのある展開に円から「フー！」など歓声が上がる。
11:50	りえさん		背後でCさんとりえさんが対角線で交換しようとするがすぐに気づかれりえさんが中心へ。

	パンダさん	全員	パンダさんから「じゃあ一旦ここまでにしましょうか」と声掛けがあり終了。自然と拍手が起こる。 「すごいよ、こんだけみんな積極的にいけるとね」とパンダさん。池ちゃん「みんなめっちゃ目線合う人探してる」。周りが笑いながら賛同している。主に大人が笑いながら感想を言い合い、こどもたちもそれを聞いて笑っている。
11:51	パンダさん、りえさん、池ちゃん		パンダさんが「一回座る？」と言い、全員床に腰をおろす。最初に「おうちに泊めて」を振り返る。パンダさん「もしも誰も交代しなかったらゲームは面白くないやんか。リスクをとっていくからゲームが動いて楽しい。素晴らしかった。目の前で交代してたりした(笑)」りえさん「ママ（Cさん）がキラキラしてた」池ちゃん「何個か芸術点の高い交換があった」。
11:52	パンダさん、りえさん		パンダさん「今年もパンダさんと一緒に遊んできましたけど、去年のことも今年のことも色々思い出してもらって、何が一番楽しかったとか、どういう瞬間が一番楽しかったとか。これが普段に活かせたとか。そういうことがあれば」りえさん「去年苦手やったけど今年やってみたらちゃうかったとか。どうやっても苦手やとかも」パンダさん「みんなにインタビューしていきますか」。 ※この後の会話では、ワークショップでの楽しかったメニューの感想や印象に残ったエピソードなどは割愛する。
11:53	Fさん、Bさん	パンダさん	パンダさん「今後の目標とかある？」 Fさん「ない」 パンダさん「進化するけど今を生きる？」 Fさん頷く。 Dさん（兄）「お前はがんばれ」 Fさんがジェスチャーで応える。Bさん「がんばってね」。
11:55	Bさん、ルジアさん	パンダさん	Bさん「中１になってもまたパンダさんに会いたい」パンダさん「どんなことしたい？」Bさん「踊ったりとか」パンダさん「身体たくさん動かせたのはよかったよね」。
11:57	みのりさん、パンダさん		みのりさん「ゲームのハードルが去年より上がったなって思ってます(笑)」大人たち「もう体力が…(笑)」パンダさん「去年やり始めたときって真ん中に立つのが不安とかドキドキとか、『嫌やな』とかあったと思うけど、どんどん積極的に。真ん中にいくことの『おいしさ』がわかってきて、真ん中に行ったほうが自分も周りもハッピーみたいなのも出てきた気がする。真ん中を恐れなくなった」。
11:59	Cさん（通訳はDさん、みのりさん）		Cさん（通訳Dさん）「今までやってきた色んな遊び全部が、真ん中に立つということとかもあるから、やることで自信がつく」「回数を重ねるにつれて、大人も参加するようになって、最初は消極的に参加していた大人も、どんどん積極的になってきた」「期間でいうと短いけど、密度が濃かった」。 みのりさん（通訳）「昔から知り合いだったかのような」Dさん（通訳）「長い間一緒に過ごしてきたかのような関係性になっている。自分達はそう感じているけど、どう思いますか」。

12:03	パンダさん	全員	パンダさん「わたしも同じように感じている。それはたぶんみんながわたしたちを受け入れようとしてくださっているからそうなんだと思う。わたしたちも迎えてもらっているから楽にいられる。不思議。普段いろんなところでワークショップをしていてもあんまりない感覚です。ホームに来ているからかもだけど、今年は外の場所でもやったし、だから場所というより人なのかも。どうしてかわたしも考えたいと思う」。
	Dさん	くるみ、パンダさん	くるみ「司会（文化祭）したの初めてやったん？」Dさん「初めて」パンダさん「堂々たるものだったし、融通がきく感じだった」「このワークショップ全体にとってもDがいてくれたことが大きい」。
12:10	Gさん	りえさん、パンダさん	りえさん「やってみたいことある？」Gさん「ピアノソロ」パンダさん「（文化祭で）めっちゃ弾いてたもんな。発表会めっちゃよかったよ。ピアノ頑張っていけたらよいね」。
12:15	池ちゃん	全員	池ちゃん「表現力というか、真ん中に立つと注目が集まって怖いというのはこの場に関してはほとんどなくなったんかなって。僕も去年からみんなといるし、ふとしたときに思い出すような場所になってるし、間違いなく堺市に来たらここのこと思い出すし、南海電車に乗ったらみんな元気かなって思う。他所に行っても真ん中に立つっていうことを応用していくだけやから、何か困ったなって思ったときはここの経験を活かしてほしい」。
12:18	りえさん	全員	りえさん「ホッとする場所になっています。みなさんが『はい、おいで』と、あったかいお布団を広げてくださってるから、飛び込んでるだけなんかなって。真ん中でやるっていう話が出てるけど、大人の人が率先して飛び込んでくださる。大人の方が真剣に人と会うことを真剣に受け取ってくれてるなっていうのが嬉しいなって」。
12:21	パンダさん、りえさん、みのりさん、池ちゃん		パンダさん「Cが言ってくれた密度がなんなのかなってもっと考えたい。エネルギーがまわってるやん。それってなんだろうって」りえさん「心のドアが開いてる感じ」みのりさん「普段は絶対にこういうゲームとか参加しない。こっそり退散しちゃう」「引き出してくれるみなさんの力だと思う」。
12:23	ルジアさん	全員	ルジアさん「この２年間、と言っても８時間よね。私が最初にお願いしたみんなが一緒に身体を動かして表現できるようになってほしいということとか、人間関係を見て自分でもう恥ずかしくないって思って欲しいってこととか（そうした夢が）、すごく叶っている。ずっと前から知り合いでずっとワークショップをやってきたみたい。来年は自分たちだけでもよいから、何かをつくって見せようっていうのを目標にしたい。嬉しくて心が感謝でいっぱい。自分が日本にいて、こんなチャンスほとんどない。自分たちが今までつくってきたものにプロの人が入ってくれて財団の人たちがサポートしてくれて、ありがとうでは足りないけど、すごく深いありがとうです」。

12:25	パンダさん	全員	パンダさん「ルジアさんからもありましたが、来年もできるということで、去年があって今年があって来年も新しいことをやっていきたいと思うので、よろしくお願いします」。一同拍手で終了。

◉記録者による全体の所感

PROJETO CONSTRUIRでの取り組みは、ゲーム性のある小さなワークショップを積み重ねることで友情関係を築いていくようなものだったと思う。個々人の変化については、こどもたちの成長が目まぐるしいため、その変化にワークショップがどれほど作用しているのかははっきりとはしない。しかし、場が育っていくような変化が確かにあった。関係性の変化は顕著で、よりいっそう心許せる関係性になっているように思った。

昨年度と比較してもポルトガル語と日本語がより入り混じるようになったように感じた。ふとしたときに堂々とポルトガル語を話すことも増えたように思う。個人間での通訳以上にみんなに伝えるために通訳してくれることも増えた。何気なくしている通訳だが、受け取った他者の言葉を咀嚼して自分の言葉で語り直す行為であり、それをさらに場全体に伝わるように発言するというところに、身体表現のようなものも感じる。他者の言葉であるという責任もあれば、言葉を発するという身体行為に自意識も働き、しっかりと伝わるように語ったりタイミングを計らなければならなかったりする。だからこそワークショップ開始時は、個人間でのコソコソ話的な通訳のほうが多かった。全体に向けた通訳が増えたことが場や信頼が育ってきたひとつの目印にも思える。

昨年度から、学校などの社会生活だけでなく親子間でも言語の壁を感じることがあると耳にしていた。日常では、自分の言葉で話すことや人の言葉をじっくり聞くことが難しく、特定の人たちとの会話や生活習慣によって語彙が固定化してしまうこともある。だから、人の気持ちを伝えるための通訳の行為が自分の言葉を語る挑戦にもなって、日常のコミュニケーションにも作用するのではないかと感じた。

また、参加者の感想にもあったが、進行役だけでなく大人たちが一緒に率先して場をつくっている様子が見られた。こどもたちも一見自由に振る舞っているようで、自分で全体のバランスを考えて行動しているように見えることも多々あった。こどもたちがお互いの苦手な部分を補い合うような場面も見られ、普段から互いを理解しているのももちろんあるが、それをさらに身体で行動に移せる機会だったのではないかと思う。

IV. アンケート調査

1. アンケート調査の概要

(1)調査対象

いづはまスマイル食堂、にしのこまんぷく食堂、PROJETO CONSTRUIRの3団体で実施する「こども食堂における芸術家派遣事業」に参加したこども、保護者。

(2)調査方法

調査票の直接配布、直接回収。なお、3つの団体はそれぞれのワークショップを行い、参加や欠席は任意で、アンケートは参加者各自の「初回」の参加と「最終」の参加の際に配布・回収を行った。なお、1回のみの参加の場合、前半（1回目または2回目）の参加は「初回」に分類し、後半（3回目～5回目）の参加は「最終」に分類した。

(3)調査期間

令和6年7月27日～令和7年1月18日

(4)回収数

113件

(5)回答者の構成比

こども/保護者の区別

こども	87件（77.0%）
保護者	26件（23.0%）

実施施設

いづはまスマイル食堂	42件（37.2%）
にしのこまんぷく食堂	51件（45.1%）
PROJETO CONSTRUIR	20件（17.7%）

初回/最終の区別

初回	69件（61.1%）
最終	44件（38.9%）

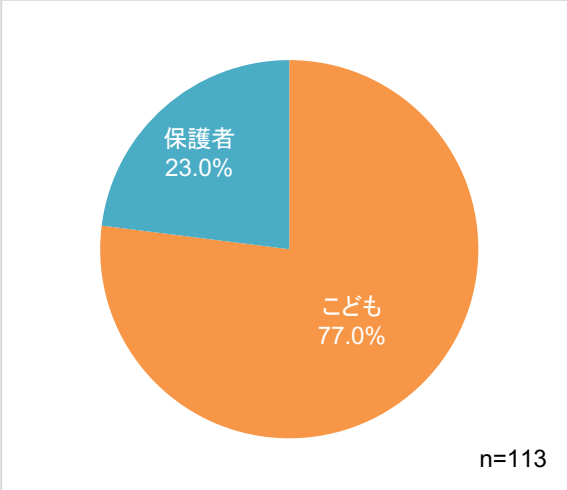
(6)調査項目

- 性別、年齢
- こども食堂に初めて参加した時期、こども食堂に参加した回数
- 普段の芸術文化にふれる機会、こども食堂のお手伝いをした経験
- こども食堂がきっかけでの会話、安心できる場所
- こども食堂での出会い、こども食堂で初めて経験したこと
- 自分自身について、イベントに参加して感じたこと

2. 調査結果

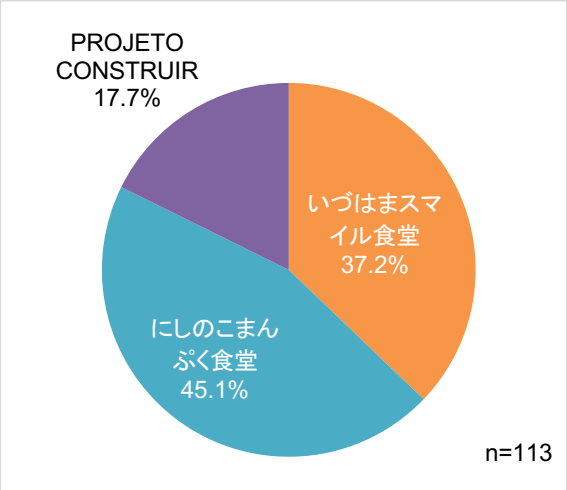
(1)調査対象

- アンケート調査は「こども」と「保護者」を対象とした2種類の調査票を用意しており、両方の調査票の合計で113件の回答があった。そのうち「こども」は77.0%、「保護者」は23.0%となっている。



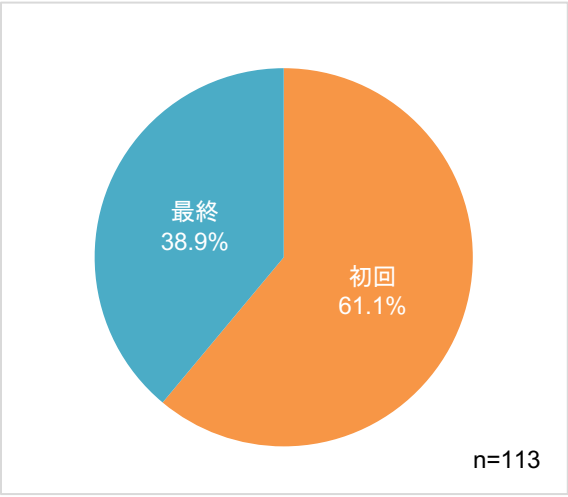
(2)実施施設

- 回答者が参加した会場は「にしのこまんぷく食堂」が45.1%、「いづはまスマイル食堂」が37.2%、「PROJETO CONSTRUIR」が17.7%となっている。



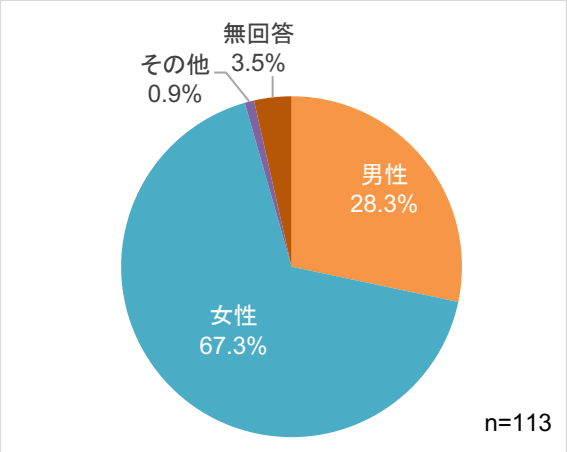
(3)回答の初回/最終の区別

- 3つの団体ではそれぞれ4回のワークショップを行い、参加や欠席は任意で、アンケートは参加者各自の「初回」の参加と「最終」の参加の際に配布・回収を行った。「初回」の回答は61.1%、「最終」の回答は38.9%となっている。



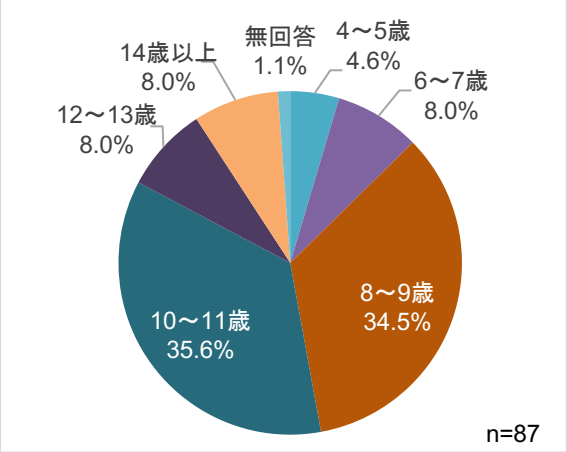
(4)性別

- 回答者の性別は、「女性」が67.3%、「男性」が28.3%となっている。

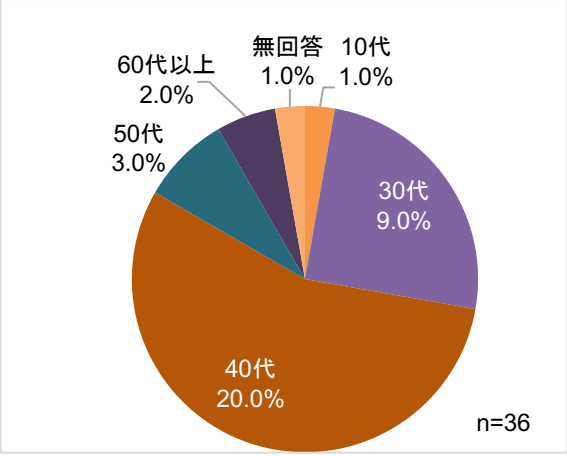


(5)年齢

- こどもの回答者の年齢は、「10～11歳」が35.6%、「8～9歳」が34.5%、「6～7歳」「12～13歳」「14歳以上」がそれぞれ8.0%で、8歳から11歳までの割合を合わせると70.1%となっている。なお、年齢の平均値は10.0歳となっている。

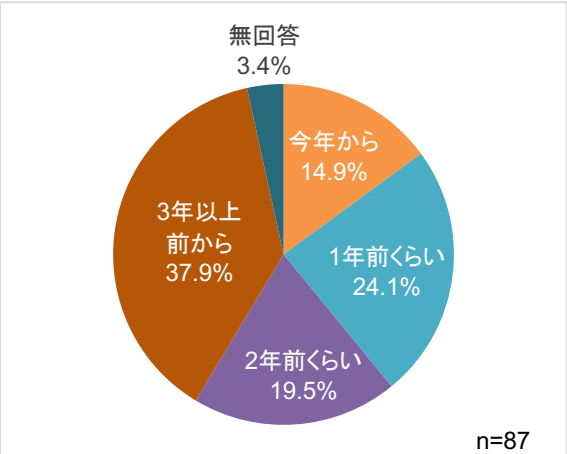


- 保護者の回答者の年齢は、「40代」が55.6%、「30代」が25.0%となっている。

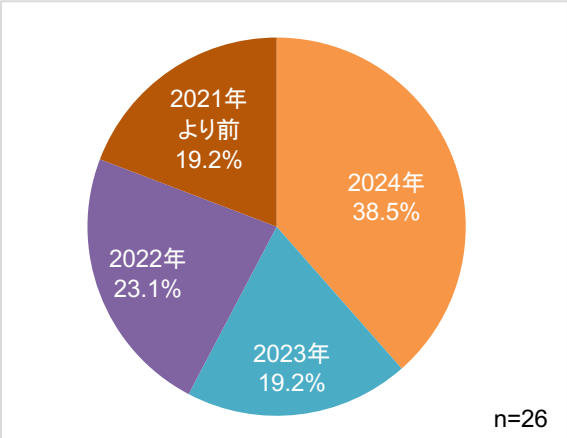


(6)こども食堂に初めて参加した時期

- こどもの回答者に初めてこども食堂に参加した時期を聞いたところ、「3年以上前から」が37.9%、「2年くらい」が19.5%、「1年前くらい」が24.1%となっている。

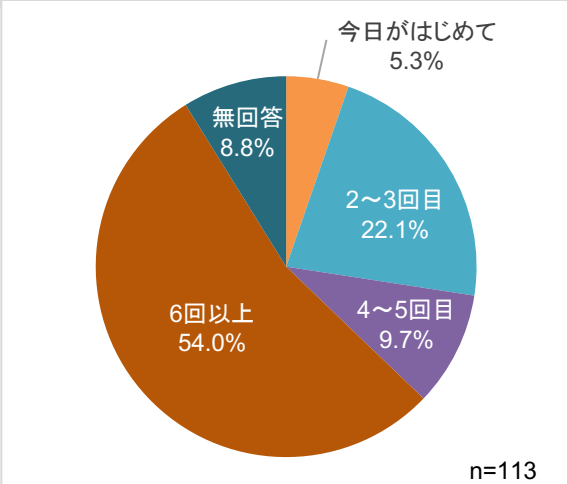


- 保護者の回答者にこども食堂に参加した時期を聞いたところ、「2024年」が38.5%、「2022年」が23.1%、「2021年より前」と「2023年」が19.2%となっている。



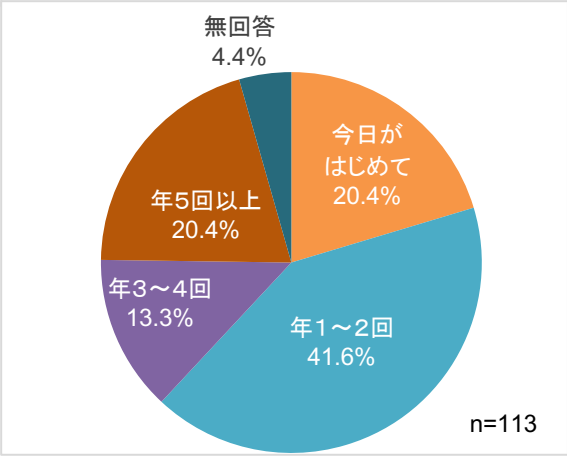
(7)こども食堂に参加した回数

- こども食堂に参加した回数は、「6回以上」が54.0%、「2～3回」が22.1%、「4～5回目」が9.7%となっている。



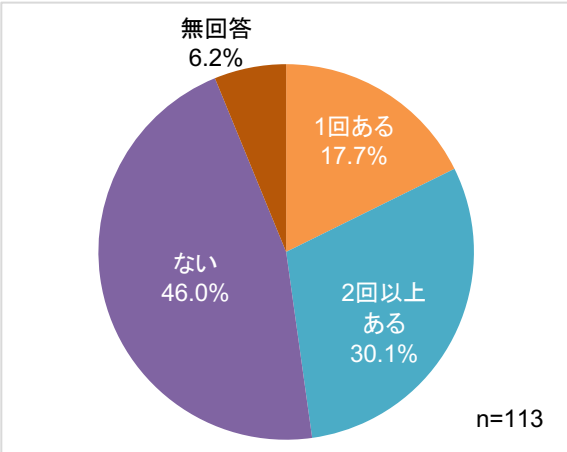
(8)普段の芸術文化にふれる機会

- 「普段、音楽や美術などの芸術文化に触れる機会がありますか？」と聞いたところ、「年1～2回」と回答した割合が38.6%、「年5回以上」が24.1%、「今日がはじめて」が20.4%となっている。



(9)こども食堂のお手伝いをした経験

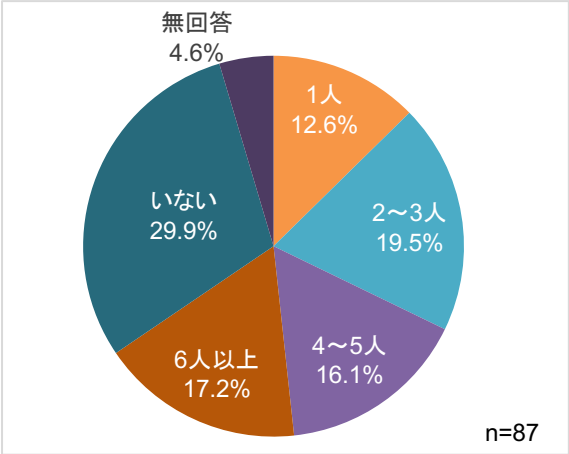
- 「こども食堂のお手伝いをしたことはありますか？」と聞いたところ、「ない」が46.0%、「2回以上ある」が30.1%、「1回ある」が17.7%となっている。



(10) こども食堂がきっかけでの会話

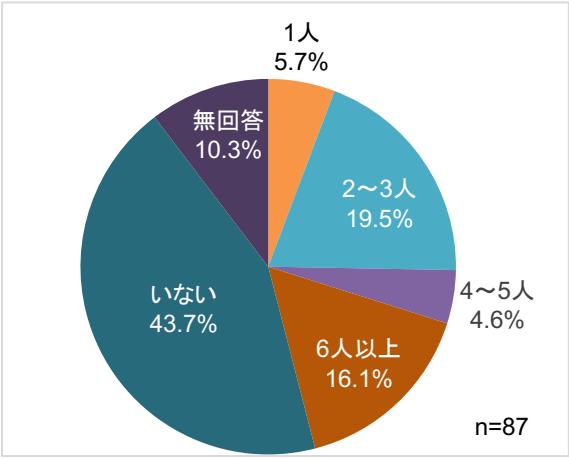
① 同じ学校の同じ学年のこども

- こどもの回答者に「こども食堂がきっかけで、話すようになったこどもは何人いますか？」という質問をしたところ、「同じ学校の同じ学年のこども」については「いない」が29.9%、「2～3人」が19.5%、「6人以上」が17.2%となっている。



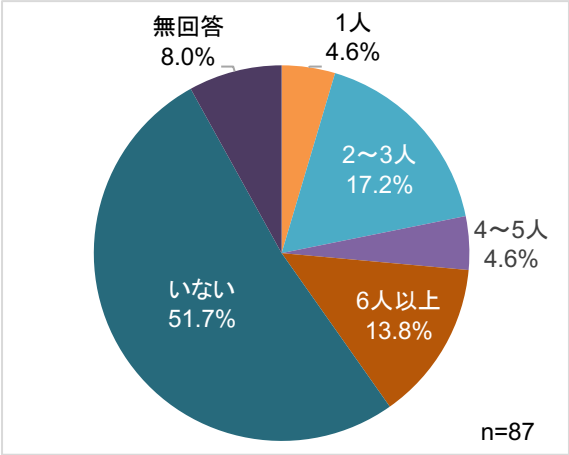
②同じ学校の違う学年のこども

- 「同じ学校の違う学年のこども」については「いない」が43.7%、「2～3人」が19.5%、「6人以上」が16.1%となっている。



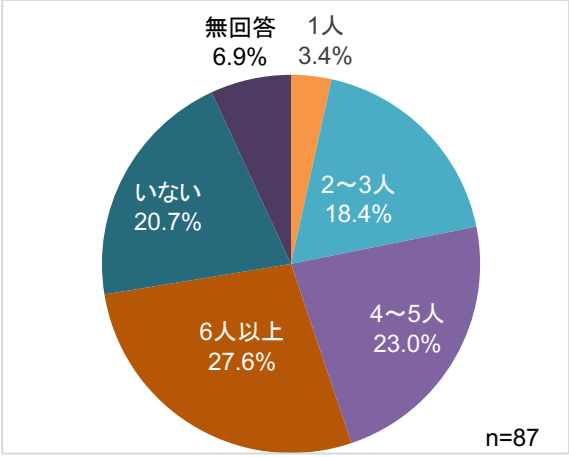
③違う学校のこども

- 「違う学校のこども」については「いない」が51.7%、「2～3人」が17.2%、「6人以上」が13.8%となっている。



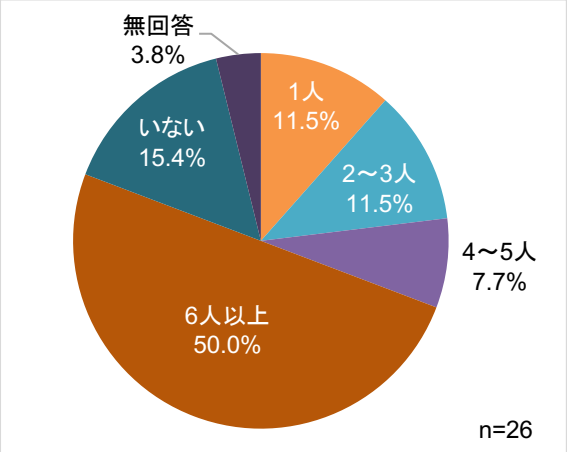
④おとな

- 「こども食堂がきっかけで、話すようになった大人は何人いますか？」という質問をしたところ、「6人以上」が27.6%、「4～5人」が23.0%、「いない」が20.7%となっている。



⑤保護者

- 保護者の回答者に「こども食堂がきっかけで、話すようになった人は何人いますか？」という質問をしたところ、「6人以上」が50.0%、「いない」が15.4%、「1人」と「2～3人」が11.5%となっている。



⑥前後比較

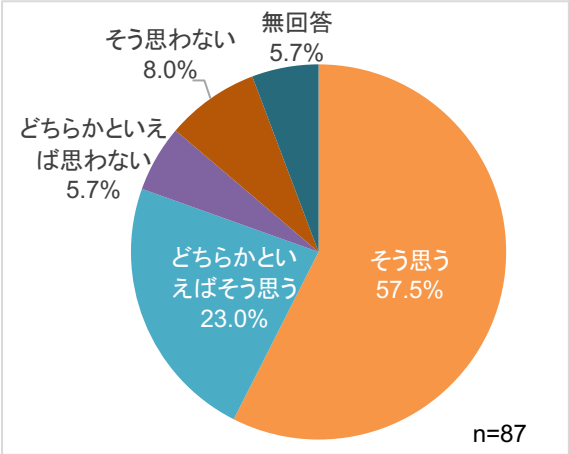
- 「こども食堂がきっかけで、話すようになったこどもは何人いますか？」という質問で、こどもの回答者で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「同じ学校の違う学年のこども」については「いない」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が減少している。

	（回答実数）	1人	2～3人	4～5人	6人以上	いない	無回答
同じ学校の同じ学年のこども（n=21）	初回	3	5	2	6	4	1
	最終	5	1	6	5	4	0
同じ学校の違う学年のこども（n=21）	初回	1	2	2	4	8	4
	最終	1	9	0	5	6	0
違う学校のこども（n=21）	初回	2	4	1	3	9	2
	最終	2	4	1	2	11	1
おとな（n=21）	初回	0	6	4	7	3	1
	最終	1	2	6	7	4	1

(11) 安心できる場所

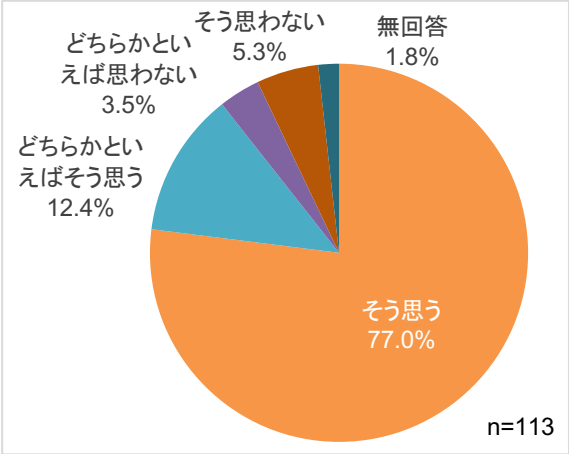
①学校

- こどもの回答者に「つぎの場所は、今のあなたにとってほっとしたり、安心できたりする場所ですか？」と質問したところ、「学校」については「そう思う」が57.5%、「どちらかといえばそう思う」が23.0%、「そう思わない」が8.0%となっている。



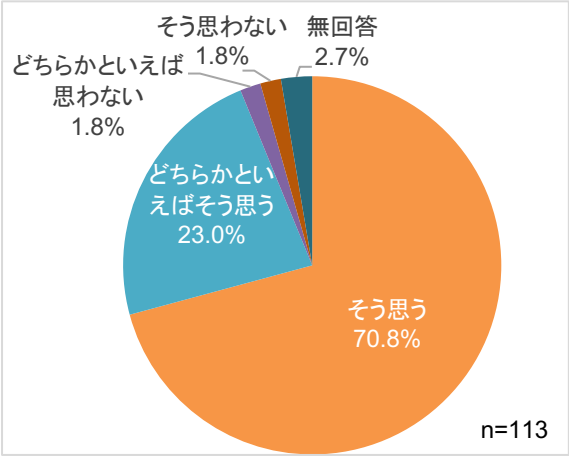
②自宅

- 「自宅」については「そう思う」が77.0%、「どちらかといえばそう思う」が12.4%となっている。



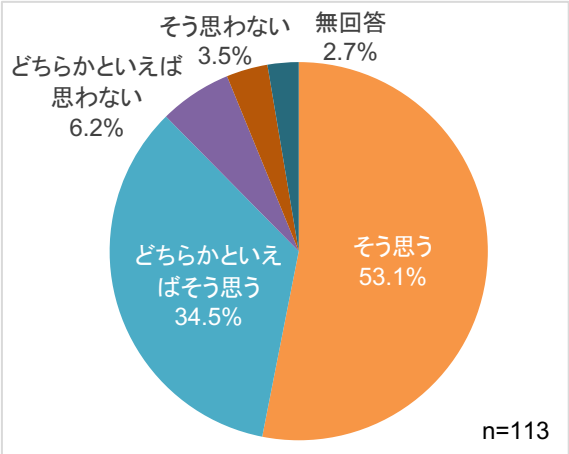
③こども食堂

- 「こども食堂」については「そう思う」が70.8%、「どちらかといえばそう思う」が23.0%となっている。



④ちいき（地域にある施設）

- 「ちいき（地域にある施設）」については「そう思う」が53.1%、「どちらかといえばそう思う」が34.5%となっている。



⑤前後比較

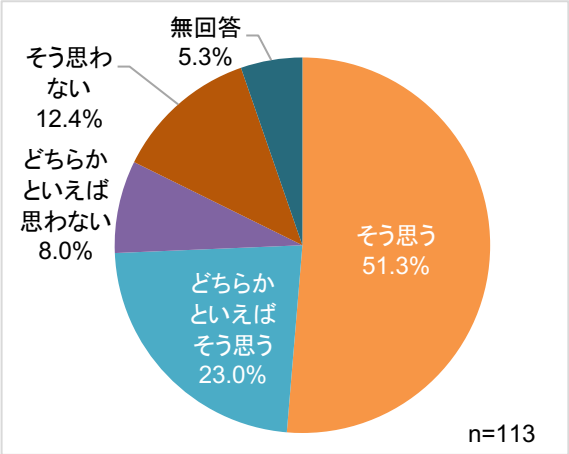
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「学校」について、「初回」では「そう思う」が11人いたが、「最終」では14人となっており、「こども食堂」について、「初回」では「そう思う」が16人いたが、「最終」では18人となっている。

（回答実数）		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
学校（n=21）	初回	11	6	3	0	1
	最終	14	3	1	3	0
家庭（自宅）（n=25）	初回	19	4	1	1	0
	最終	18	4	1	2	0
こども食堂（n=25）	初回	16	7	1	0	1
	最終	18	6	0	1	0
ちいき（地域にある施設）（n=25）	初回	12	9	2	1	1
	最終	12	10	1	2	0

(12) こども食堂での出会い

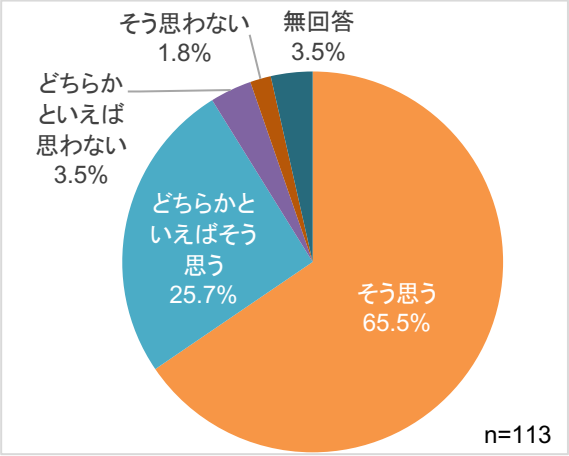
①なんでも悩みを相談できる人がいる

- 「こども食堂で出会った人について、つぎのような人はいますか？」という質問をしたところ、「なんでも悩みを相談できる人がいる」については「そう思う」が51.3%、「どちらかといえばそう思う」が23.0%、「そう思わない」が12.4%となっている。



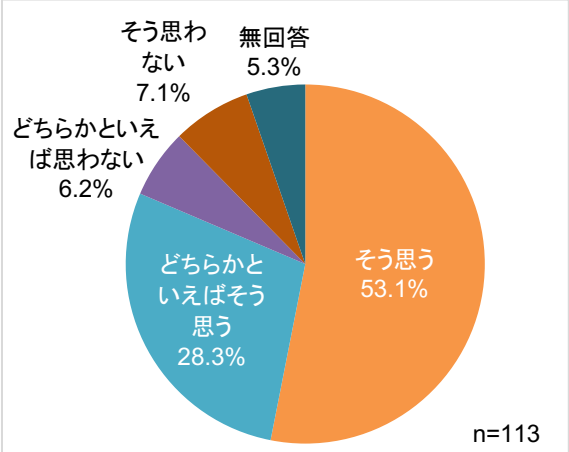
②困ったときは助けてくれる人がいる

- 「困ったときは助けてくれる人がいる」については「そう思う」が65.5%、「どちらかといえばそう思う」が25.7%、「どちらかといえば思わない」が3.5%となっている。



③自分のことを正直に話せる人がいる

「自分のことを正直に話せる人がいる」については「そう思う」が53.1%、「どちらかといえばそう思う」が28.3%、「どちらかといえば思わない」が6.2%となっている。



④前後比較

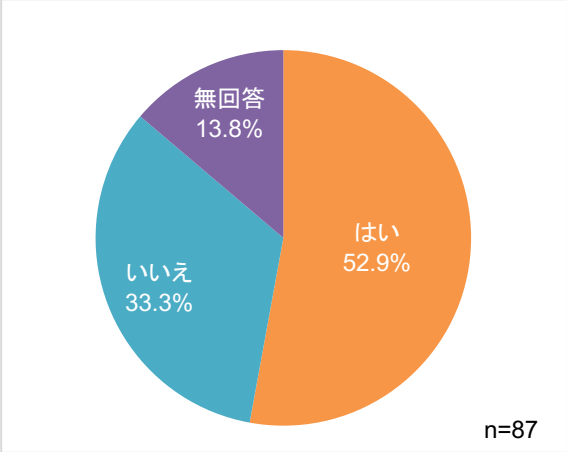
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「なんでも悩みを相談できる人がいる」「困ったときは助けてくれる人がいる」「自分のことを正直に話せる人がいる」について、「そう思う」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が増加している。

	（回答実数）	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
なんでも悩みを相談できる人がいる（n=25）	初回	10	8	3	3	1
	最終	13	6	2	4	0
困ったときは助けてくれる人がいる（n=25）	初回	17	7	1	0	0
	最終	19	6	0	0	0
他の人に言えない本音を話せる人がいる（n=25）	初回	12	6	3	3	1
	最終	14	6	1	4	0

(13) こども食堂で初めて経験したことはあるか

①こども全体

- こどもの回答者に「こども食堂で初めて経験したことはありますか？」と聞いたところ、「はい」が52.9%、「いいえ」が33.3%となっている。自由記述では「音楽ワークショップ」、「おめんづくり」、「日本語で話し始めた」などの回答が見られる。



②前後比較

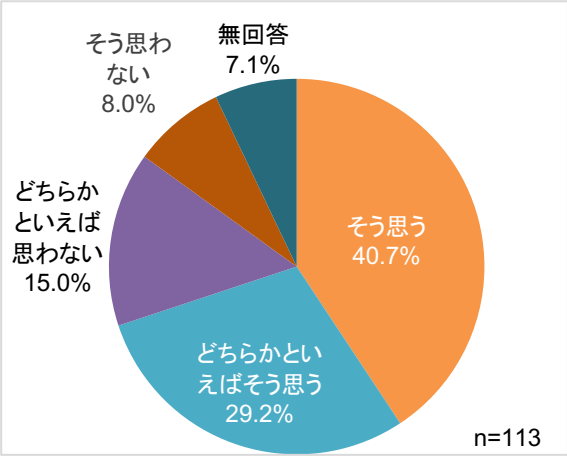
- 「こども食堂で初めて経験したことはありますか？」という質問で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「はい」とする回答が、「初回」に比べて「最終」が増加している。

	（回答実数）	はい	いいえ	無回答
こども食堂で初めて経験したことはあるか（n=21）	初回	10	8	3
	最終	12	7	2

(14) 自分自身について

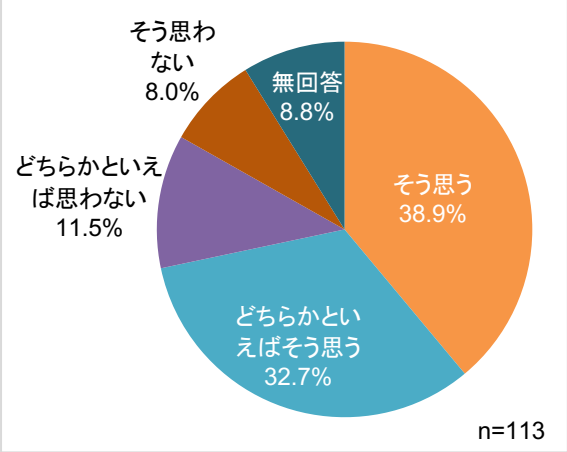
①誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う

- 「次のことはあなた自身にどのくらいあてはまりますか？」という質問で、「とでもすぐ仲良くなれる方だと思う」については「そう思う」が40.7%、「どちらかといえばそう思う」が29.2%、「どちらかといえば思わない」が15.0%となっている。



②ひとのことは信じて頼ってもよいと思う

- 「ひとのことは信じて頼ってもよいと思う」については「そう思う」が38.9%、「どちらかといえばそう思う」が32.7%、「どちらかといえば思わない」が11.5%となっている。



④前後比較

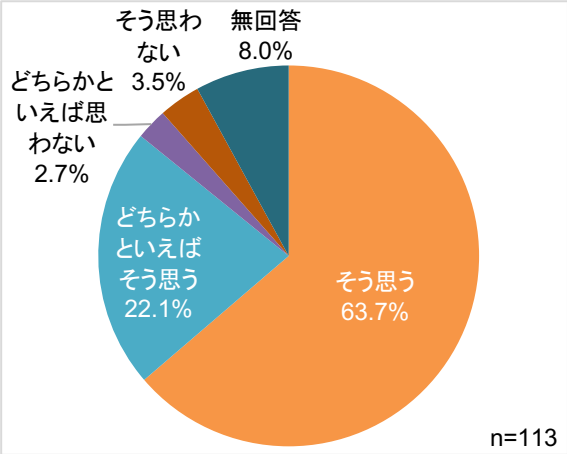
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う」については「そう思う」とする回答が「初回」に比べて「最終」が減少しており、「ひとのことは信じて頼ってよいと思う」については「そう思うとする回答が「初回」に比べて「最終」が増加している。

（回答実数）		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う（n=25）	初回	14	6	2	2	1
	最終	10	14	0	1	0
ひとのことは信じて頼ってもよいと思う（n=25）	初回	10	7	4	1	3
	最終	14	6	2	3	0

(15) イベントに参加して感じたこと

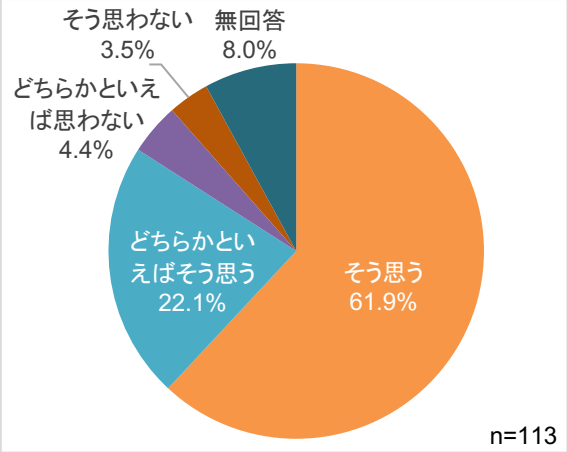
①音楽・美術・演劇が身近になり、楽しくなった

- 「今日のイベントに参加して、どんなことを感じましたか？」という質問で、「音楽・美術・演劇が身近になり、楽しくなった」は「そう思う」が63.7%、「どちらかといえばそう思う」が22.1%となっている。



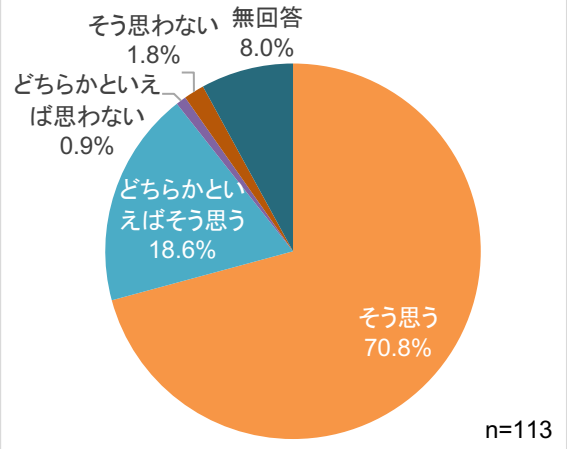
②元気になったりやさしい気持ちになった

- 「元気になったりやさしい気持ちになった」は「そう思う」が61.9%、「どちらかといえばそう思う」が22.1%となっている。



③友だちや食堂の人となかよくなった

- 「友だちや食堂の人となかよくなった」は「そう思う」が70.8%、「どちらかといえばそう思う」が18.6%となっている。



⑤前後比較

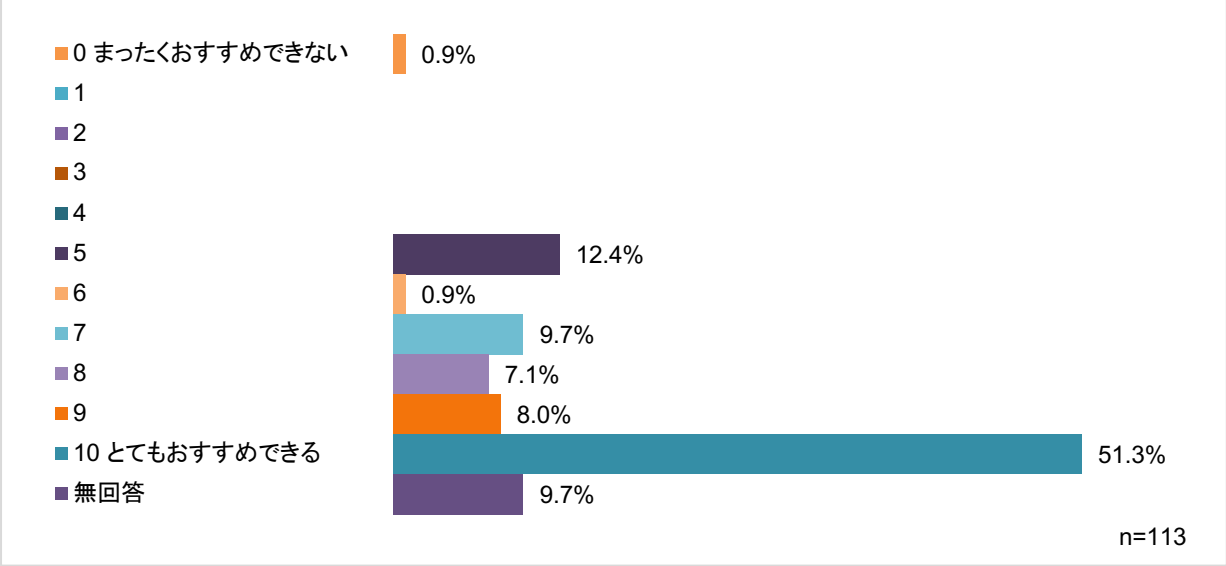
- 複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「音楽・美術・演劇が身近になり、楽しくなった」については、「そう思う」とする回答が「初回」に比べて「最終」が増加している。

（回答実数）		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない	無回答
音楽や美術が身近になり、楽しくなった（n=25）	初回	16	5	1	1	2
	最終	17	5	0	3	0
元気になったりやさしい気持ちになった（n=25）	初回	16	6	1	1	1
	最終	16	8	0	0	1
友だちや食堂の人となかよくなった（n=25）	初回	19	4	0	0	2
	最終	19	6	0	0	0

(16) 友だちにどの程度すすめたいか

①全体

- 「今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか」という質問で、「0 まったくおすすめできない」から「10 とてもおすすめできる」までの11項目から一つを選択してもらったところ、「10 とてもおすすめできる」が51.3%、「5」が12.4%、「7」が9.7%となっている。11項目を数値として平均化すると8.6点となっている。



- 「今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか」という質問で、複数回のワークショップに参加した同一人物の初回と最終の回答を比較した。「10 とてもおすすめできる」とする回答が「初回」に比べて「最終」が減少する一方で、「7」「8」「9」とする回答が「初回」に比べて「最終」が増加している。11項目を数値として平均化すると「初回」では8.2点、「最終」では8.8点となっている。

（回答実数）		0 まったくおすすめできない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10 とてもおすすめできる	無回答
友だちにどの程度すすめたいか (n=25)	初回	1	0	0	0	0	4	0	3	1	1	13	2
	最終	0	0	0	0	0	2	0	4	2	4	12	1

3. 調査票

(1)児童用調査票

イベントアンケート【こども向け】　ウェブかいとうもできます

今日のひにち：　月　日
性別　：　男　女　その他
誕生日：　月　日（　歳）

あなたについて、あてはまるものに○をしてください。

No	しつもん	かいとう
1	こども食堂にはじめて参加したのはいつですか？	今年から　1年前くらい　2年前くらい　3年以上前から
2	こども食堂に参加した回数	今日がはじめて　2～3回目　4～5回目　6回以上
3	ふだん、音楽・美術・演劇などの芸術を見たり、きいたりすることはありますか？	今日がはじめて　年1～2回　年3～4回　年5回以上
4	こども食堂のお手伝いをしたことはありますか？	1回ある　2回以上ある　ない
5	こども食堂がきっかけで、話すようになったこどもは何人いますか？	おなじ学校のおなじ学年のこども
		1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
6		おなじ学校のちがう学年のこども
		1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
7		ちがう学校のこども
		1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
8	こども食堂がきっかけで、話すようになった大人は何人いますか？	1人　2～3人　4～5人　6人以上　いない
9	つぎの場所は、今のあなたにとってほっとしたり、安心できたりする場所ですか？	学校
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
10		家庭（じぶんのおうち）
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
11		こども食堂
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
12		ちいき（公民館や公園など、住んでいるまちにある建物や場所）
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
13	こども食堂で出会った人（友だちや大人など）について、つぎのような人はいますか？	なんでも悩みを相談できる人がいる
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
14		こまったときは助けてくれる人がいる
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
15		自分のことを正直に話せる人がいる
		そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない
16	こども食堂で初めて経験したことはありますか？	はい　※たとえばどんなことか書いてください （　） いいえ

うらもあります。

イベントアンケート【こども向け】

No.	しつもん	かいとう			
17	次のことはあなた自身にどのくらいあてはまりますか？	誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
18		ひとのことは信じて頼ってもよいと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
19	今日のイベントに参加して、どんなことを感じましたか？	警察が身近になり、楽しくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
20		元気になったりやさしい気持ちになった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
21		友だちや食堂の人となかよくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22	今日のようなイベントを、友だちにどの程度すすめたいと思いますか。点数に○をつけてください。	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 まったくおすすめできない ← → とてもおすすめできる			

今日のイベントについて、意見や感想があれば自由に書いてください。イラストで表現してもらってもよいです。

アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。

(2)保護者用調査票

ウェブ回答も
こちらから
できます

イベントアンケート【保護者向け】

あなたについて、教えてください。

No	質問	回答			
1	記入日	月　　日			
2	性別	男　　女　　その他			
3	年代	10 代　20 代　30 代　40 代　50 代　60 代以上			
4	あなたの誕生日	月　　日			
5	今日はお子さんと一緒の参加ですか	はい：お子さんの年齢（　　）歳　いいえ			
6	こども食堂に初めて参加した時期	2024 年　2023 年　2022 年　2021 年より前			
7	こども食堂に参加した回数	今日が初めて　2～3 回目　4～5 回目　6 回以上			
8	ふだん、音楽・美術・演劇などの芸術を見たり、きいたりすることはありますか？	今日がはじめて　年１～２回　年３～４回　年５回以上			
9	こども食堂のお手伝いをしたことはありますか？	1 回ある　2 回以上ある　ない			
10	こども食堂がきっかけで、話すようになった人は何人いますか？	1 人　2～3 人　4～5 人　6 人以上　いない			
11	次の場所は、今のあなたにとって、ほっとしたり、安心できたりする場所ですか？	家庭（自宅）			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
12		こども食堂			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
13		地域（公民館や公園など住んでいるまちにある施設や場所）			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
14	こども食堂で出会った人について、次のような人はいますか？	何でも悩みを相談できる人がいる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15		困った時は助けてくれる人がいる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
16		自分のことを正直に話せる人がいる			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない

裏もあります。

イベントアンケート【保護者向け】

No	質問	回答			
17	次のことはあなた自身にどのくらい当てはまりますか？	誰とでもすぐ仲良くなれる方だと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
18		ひとのことは信じて頼ってもよいと思う			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
19	今日のイベントに参加して、どんなことを感じましたか？	音楽が身近になり、楽しくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
20		元気になったりやさしい気持ちになった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
21		友だちや食堂の人と仲がよくなった			
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
22	今日のようなイベントを、友人や知人にどの程度勧めたいと思いますか。点数に〇を付けてください。	0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 全くお勧めできない ⟷ とてもお勧めできる			

今日のイベントについて、印象に残るような出来事やご意見・ご感想があれば自由に記入してください。

アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。

V. ヒアリング調査

1. アーティストへのヒアリング

(1)実施概要

実施日： 令和７年2月12日（水）14:00～16:00
会　場： フェニーチェ堺（堺市民芸術文化ホール）小スタジオC
参加者： 古橋果林さん（音楽ワークショップリーダー/ファシリテーター）、井上嘉和さん（写真・造形）、
　　大熊ねこさん（俳優/ワークショップデザイナー）
聞き手： 大澤寅雄（合同会社文化コモンズ研究所）

(2)意見要旨

①関連プログラムの実績

- 私の専門の楽器はピアノだ。コンサートなどをすることもあるが、ワークショップをする機会がたくさんあり、普段から音楽ワークショップの活動をしている。音楽ワークショップといってもいろいろな活動があるが、自分としては、お客様が聞くだけでなく音楽に参加する場であることと、音楽を通して人が交流したりコミュニケーションを取ったりすることをベースとして面白い音楽が生まれることを考えながら普段活動している。（古橋）
- 演劇の手法を生かして、こどもたちや大人たちとも、コミュニケーションをテーマにするワークショップに、俳優業と並行して活動している。今までは演劇にあらかじめ興味がある人や、中学や高校に行ってクラス劇を一緒につくる指導などが主だったが、支援が必要な中学生、高校生と関わることがものすごく増えて、あらかじめ演劇やアートを求めていないけれども、何かしらアート心（ごころ）を触発することを、自分の課題として与えられる場が増えた。それをやっていて、すごく楽しいなと思っている。（大熊）
- 本業はカメラマンをしていて、自分のこどもが小さい頃に節分の日に段ボールでお面をつくったのがきっかけで、趣味の延長で、みんなで一緒に段ボールのお面をつくる活動を副業という感じで、ずっとやっていた。続けていればそれなりに知ってもらう方が増えてきた。今は、自分がつくることより、こどもたちと大人も一緒にみんなでつくったお面をかぶって楽しむ活動から、一体感が出てくる面白さを感じている。「段ボールアーティスト」というより「段ボールお面作家」、「工作です」と言っている。（井上）

②プログラムへの期待

- 私はいづはまスマイル食堂で３年間通い続けていて、参加してくれているこどもたちは、同じ子もいるし、新しい子もいて、緩く流動的、でも継続的のような感じでやっている。３年目は、こども食堂だからこうしたいというよりも、具体的に、「あの人（こども）たちと音楽をしたい」というニュアンスが実はすごく増えている感じだ。（古橋）
- ずっとアーティストがいろいろ指示してこどもたちと一緒にやるような流れだったのを、昨年度の終わりか今年度か、大きくなったこどもたちに「こどもスタッフ」として関わってもらう形を始めた。単に役割を与えるだけではなく、アーティストに近くて、ほぼ同僚のような気持ちで、音楽的にも、物を動かすことも手伝ってくれる。それが心地良くて、音楽だからこその人間関係、チーム構成ができてきたと思う。（古橋）
- 私が行かせていただているPROJETO CONSTRUIRが、ブラジルにルーツを持つ方が集まるこども食堂で、地域の方だけではなくて、いろいろな地域からブラジルにルーツを持っていらっしゃる方が土曜日に集まってきて、みんなでご飯を食べて、主にポルトガル語で情報交換をする場となっている。最初、どのような言葉の壁があるのか分からなかったが、実際やってみたら、驚くほど言葉があまり関係ないということが、１年目は衝撃だった。（大熊）
- 今年度４回を通して、やっときちんと人として出会えて、また来年という感じで終わった。目標を持たないわけではないが、流動的に緩やかに、みんなの中にも「こうなったらいいな」が何となくあるものを一緒にやりながら見つけていけるのではないかという期待があった。ここから表現活動を通してどこまで行けるかを「一緒に走ろうぜ」という感じで、今年度は４回行った。（大熊）

- 今回が初めての参加だった。ワークショップ自体は結構経験させてもらっていて、小学生が参加する時は親子の参加を提案してきたが、今回、にしのこまんぷく食堂では小学生だけが参加してやるところが、自分としてはハードルと思っていた。そういう意味で、安全面について考えて、１回目はいつもどおりやってみて、２回目は懸念していた部分をどのようにクリアしていくかを考えた。（井上）
- カッターも危ないので、ハサミだけにして、カッターナイフを使う場合は相談してやるようにした。実際トライ＆エラーでやっていく感じだったが、懸念を一個ずつ出しながらクリアをしていけた。安全面は僕の中ですごく大事で、けががなく、どのようにやっていけるかを探っていた。（井上）
- 「ペルソナ」と言うが、お面をかぶると普段の自分ではない者になり大胆になることが多いと前々から思っていた。こどもはもちろん大人にしても、被ると動きが怪しくなったり、大きな声を出したりするところが面白い。それがこどもに顕著に出る。（井上）
- 今回４回やった中で、最後に「被ってみんなでダンスしよう」という話になって、正直「大丈夫かな、やってくれるかな」と思っていた。みんな一生懸命つくっていて、最後の日につくったお面を、新しく来たダンスの先生、楽器の先生に「これ、俺がつくってん」「私これやねん」と言って、すごく誇らしげに見せていた。その誇らしい気分のまま、「俺、このキャラクターになってんねん」という感じで、すごく堂々と踊っていて、これはすごいなと正直僕も驚いた。（井上）
- 自分はあくまでサポートなので、材料をそろえて、あとはほぼお任せした。つくり方 にしても、最初の段階では一緒につくっていくけれども、本当に自分の好きなようにつくっていくので、「自分でつくったお面」という意識がすごく強い感じがした。あくまでこどもが自由に遊べる場所をつくるというポジションで、相談されたら「こうやったらできるからやってみて」と言う。（井上）
- こどもが自発的に「やってみたい」と思うことが重要。できるだけ枠を設けない状態をつくっている。安全面の約束事を「柵」に例えるとすれば、「柵の中であればどこまでも何をやってもいいよ」と言ってあげると、こどもはギリギリまでやる。自分はそれを見ている状態で、逆にいつも驚いている。そのような場所をつくるワークショップという感じがする。（井上）
- PROJETO CONSTRUIRでは、「今年は体を動かすことをもっとやりたい」、「食堂のご飯をつくってくれている大人の方にも参加してもらいたい」という田中さんの願いもあって、４回中３回は別の場所の多目的スペースでできたことが、、昨年度と一番違うところだった。（大熊）
- やはり広い所だと体を動かしてやれる可能性が広がったので、本当にそのまま演劇に繋がるようなワークが自然とできるようになった。それは空間に呼ばれて、そのような正解に自然となっていったと思う。（大熊）
- 女子が全然ダンスをやらないという話を聞いたので、それにヒントになるような、即興でまねをして踊れるダンスをみんなでやった。その中で、昨年のベースもあると思うが、眠っていた表現欲が表現しやすくなって、私たちにも慣れてもらい、ハードルが取れていって、体を動かしていろいろなことができた。自然と、これでせりふを話したら演劇になるようなところまで一緒に行けた。「では、来年は作品がつくれますね」という感じに結果的になったと思う。（大熊）
- （普段食堂を開催している家屋の中でやるよりも）外に出たほうが、いい意味で自由になれたかもしれない。１回目は緊張感もあったが、２回目、３回目となってくると、その場所の開放感がいいように作用したところもあると思っている。言葉は本当に関係なかった。通訳してもらわなければいけないから時間を取ろうということは一切考えずに、ルールを話して、同時並行でみんなが通訳して、「行ける？」「よし！」という感じで、何も言葉のことを気にせずにやれた。（大熊）
- いづはまスマイル食堂は、「バンド感」という言葉以上に言語化するのが難しいのだが、隣にいて一緒に音楽家同士で合わせしている時と同じような空気感だった。加えて、いつも２階でワークショップをやっていて、１階でご飯をつくっていて、ワークショップになじめなかったら１階に逃げて、また戻ってこれるような感じが、私としてもやりやすいし、空間としてすごくいいなと思っている。（古橋）
- 無理もせず、安心感があっていいなと思っていて、１年目からずっとその空間の温かさのよさも感じながら、３年の変化としては「バンド感」という言葉で話すと、ワークショップのあと、みんなでご飯を食べてから帰るまでの一連の流れを全員バンドでやっているような、お手伝いで来てくださる大人の方たちとは直接音を交わしていないけれども、一緒に音楽をした満足感があって、みんなでバンドのメンバーのような感じが、今までよりも強く感じた。（古橋）

③こどもの居場所へアーティスト派遣することの価値

- 「こんな大人もいるよ」と、触れ合える場になっていったらいいと感じている。大人の方や保護者の方と、終わった後にご飯を一緒に食べている時は、「生で楽器や音楽を聞ける機会がそれほどないから、すごくよかった」と言っていただくことも多く、めったに聞けない音楽が聞けた貴重な場だと思ってもらえるのはうれしいけれども、実は、「これめっちゃおもろい」と言い合って一緒に音楽をつくる場になり得るのではないかと思っている。（古橋）
- アーティストとこどもたちが一緒に同じ方向を向いて、同じことをする場だからこそ、「こんなことに夢中になってもいいんだ、本気になっていいんだ」というのを感じてもらえて、それを自分もアーティストとして一緒に探究したいと考えている。それが、アーティストがこどもの居場所に行くことの価値なのかなと思っている。（古橋）
- 「こどもスタッフ」という役割をつくってから、このワークショップで自分も活躍できるという空気感がじわじわと浸透し始めたことも（積極的な参加の姿勢に）影響していると思う。募集の段階で、こどもスタッフとして楽器を演奏している子も募集していて、われわれアーティストもこどもスタッフを頼っているので、その空気感が伝わったと思う。（古橋）
- こどもが成長していく姿を感じていて、１年でこんなに変わるのかと思うぐらいの成長を見せてくれる。言葉も、発想もそうだ。それが私たちにある程度慣れてくれたというのもあるだろうけれども、やはり人間として１年でこんなに成長するのを各所に見受けられて感動した。（大熊）
- 普段、学校では言葉が通じないことを理由にコミュニケーションがうまく取れなかったり、先生にも分かってもらえなかったり、うまくいかないから学校に行きたくなくなるといったことがたくさん起きている。アーティストの役割かどうかは不可分な部分もあると思うが、彼ら自身の持っているものを、私たちがどのように引き出すきっかけになれるか。（大熊）
- 本当は力を持っているのに、それを日常生活の中で発揮できないから認めてもらえないという鬱屈（うっくつ）とした気持ちがある。「これでいいんだ」というのが花開けるのかなというのを、実践者の田中さんのお話を聞いていても思う。私たちが行くことが、別にそれを伸ばしてあげるということではなくて、「それいいね」と言える場をつくることしかないという感じがする。でも、それが私は一番うれしいと思う。（大熊）
- 私が用意してきたゲームを一つもやらなくても、みんなが今やりたいことを、ああだね、こうだねとやっていくうちに、みんなの達成するポイントが見つかることがあることが実感として分かった。それは、ここだから私もやらせてもらえるし、他の現場でもすごく役立っていると思っている。（大熊）
- 私がリーダーとして「みんなこうするよ」ともっていくのではなくて、みんなが時間を共有して、これをやろう、この気分だ、あの気分だと自主的に選びとって、それで今日はみんなでこういう学びを得たと、私がふりかえりまとめられたら、それでみんなの時間になるのではないか。（大熊）
- こどものノリをつぶさないことが大事なのかなと思う。ブレーキをかけずに、乗っていって、ただ、こちらがペースを考えてあげて、うまいことノリを捕まえる。（井上）
- 最近のこどもを見ていると、（PCやタブレット、スマホの）画面の中で作業をすることが多いけれども、自分で実際に手を動かして作業してみると、案外できてしまえるもので、結局何かをつくる時に、全部をパソコンの中でつくらなくてもいいのではないかというのは常々思っている。やはり人間は手を動かすこと自体がもともと快感なのだ。それをもっと手を動かす機会をつくることで、このようなものがつくれるのだ、こんな簡単にできるのだというのを知ってほしいと思う。選択肢の一つとして、手でつくるのは十分可能性があることを感じている。（井上）
- 「これをやったらこういうけがをする」ということを知っていてほしいとも思う。ふざけて触っているとやけどをするとか、カッターの使い方を間違えるとけがをするということが、つくっていると常にまとわりついてくることで、それを感じながらつくってほしい。「つくる＝危ないこと」を想像して参加してもらう。もちろんパソコンの中ではけがはしないけれども、だからといって、それをなくして安全にしていくより、けがをすることもあるかもしれないけれども実際の体でつくっていきたいと思う。（井上）
- 没頭してしまえば、楽器でも、ダンスでも、のめり込めばのめり込むほど自分の世界になっていく経験がある。集中すればするほど客観視する自分が見えてくる。そこまで没頭できているかどうかは分からないけれども、そのような体験をできたら幸せなことではないか。つくっている時も集中すると時間があっという間に過ぎて、ワンダーなことが起きているような体験を少しでも感じてほしい。（井上）

④実施に向けた課題

- 段ボールのお面づくりでは、開始時間がない。始まりと終わりが自由なので、少し差が出ることは気になったところではある。ただ、もちろんみんなが工作を好きではないので、ある程度つくったら「もういい」と言って帰る子もいるけれども、それはそれで、その子にとってはそこが完成なので、いいのかなと思う。それの良し悪しは難しいところだが、われわれも、その子にとっての個性や自主性で、「完成はここなのかな」と考える。（井上）
- 「もう少し頑張ったら？」と言いたくなる気持ちもあるけれども、割とのみ込むようにはしている。自主性が大事で、やらされるのは絶対に楽しくない。ひょっとしたら、違う機会で来た時にはノリノリでやるかもしれないので、一度やらされて嫌な思い出になってしまうと、それから楽しくなるのは難しいのではないかと思う。だから、嫌な思いはしてほしくない。（井上）
- PROJETO CONSTRUIRでは、近くの地域会館を使ってワークショップができたら、そこに出入りする他の方々も交流があるかもしれないという希望があったけれども、それができなかった。ブラジルルーツの方が集まってこられていることも食堂という特別性があって、地域と少し分断されていると感じた。大阪やいろいろな所から、同じルーツを持って、言葉の壁という同じ悩みを持つ人たちが集まってきている側面があるので、そこの自治会と溶け込んでいるかというと、別の課題がそこにはあった。（大熊）
- せっかくそこの場所でやっていることを、「こういう活動があるんだ」「こんないいことをしていたのだ」と知ってもらうだけでも、次回にやる時に少しでも垣根が低くなってくれたらと思う。（井上）
- こども食堂に関わってくださっている人がすごくたくさんいるけれども、音楽ワークショップを通して関われた人はごく一部だ。その上で、前年度に比べると固まってきた印象がある。だからこそ、関われていない人たちと今後何かしら関われるようなチャンスがあったらいいと思う。（古橋）
- 最近自分が考えていることで、こういう事業をやる時に、もちろん音楽が手段になっていていいと思うけれども、自分は音楽を担う側だから、個人としてはあまり「手段」と思わないほうがいいのだなと、この１～２年ぐらいですごく感じるようになった。「音楽の力」という言葉はあまり好きではないけれども、どのような音楽でもいいわけではないし、それは「私がやりたい音楽をやりたい」ということではなく、その場に集っている人と音楽を追究するような視点を、その場に関わる人は誰も思ってなかったら、すごくもったいないのではないかと考えている。（古橋）
- 「もっと追究していってほしい」という気持ちもありながら、でも無理強いはできないところもあって、楽しんで進んでやってくれたら一番いいのだが、そういう道しるべをつくる方法はあるのかと考える。（井上）
- 例えば、「音程どおりに正確なリズムで」という話ではなく、技術がなくても面白い音楽があると思っている。一見ただこどもが音を鳴らしただけの一音かもしれないけれども、その一音に音楽性を見いだせるのは音楽家だけだと思う。初めてたたいた太鼓の音でも、すごく面白い音楽かもしれないことを追究できる存在としても、アーティストは関わりたい。私としては、そういうところを発掘し、その場でシェアできることが、音楽ワークショップをやる音楽家のスキルになるのではないかと、願望も含めて思っている。（古橋）
- 堺市のアーティストバンクに登録しているアーティストたちと一緒に音楽ワークショップをやって、関係性が築かれて、だいぶアーティストとしてのチームはできてきた。だから、そのチームの変化としてはありつつ、こういう話はまだ一緒にはできていない。（古橋）
- 時間割のようにワークショップの進行を決めて、決められたとおりに終わると、「いまいちだな」と思う。意外な反応があって、それに応えようとして軌道修正することが起きた時のほうが、いいワークショップだったと思うけれども、そこまではまだ登録アーティストたちとは共有できていない。（古橋）
- 音楽ではないけれども、私もそういう瞬間があると思っている。予定していないけれども、この人がぽろっと言った一言が、「今、もうこれしかないよね」というところにぎゅっと行って、それで予定していなかったほうに行く瞬間がある。（大熊）
- 想定内のワークショップは満点ではない。うまくいったら60点、70点あるかで、こちらとしては想像を超えてきてほしいというのは常にある。（井上）
- 「失敗」とか「下手」という概念を越えないと、多分難しいのではないかと思う。お面づくりには失敗がないと考えているが、そもそも自分の中で上手とか下手というのは関係がない。それは歌やダンスでも近いのかなと思います。「これをやったから失敗」ではない。（井上）

- 次に気付いた時はこのような感じで歌っていて、気付いたら音楽していたような瞬間をつくれると、すごくいいなと思う。日常生活の中にいると、日常生活と音楽が切り離されて、特に音楽を「聴く」ことはみんな日常の中に入っているけれども、音楽を「する」のは切り離されている感じがして、それも嫌だと思っていた。（古橋）

⑤広く展開するための留意点

- 知ってもらうことが一番いい。関係者以外の人にもできるだけ見れる機会があったらいいと思う。例えば、つくったお面を発表したり、つくった演劇を観てもらう、演奏をいろいろな人に観てもらう発表会のようなものがあると、知ってもらうきっかけにはなりやすいと思う。「関係がない」と言っていた人たちも、関わると無視できなくなってくると思う。（井上）
- こどもが一生懸命やっているのを見て、それを嫌がる人はそういない。関わる人間を増やすチャンスがあればいいのではないか。見てもらうに尽きるのだと思いつつ、その人たちに対してワークショップをするのが一番早いと思う。（井上）
- 見てもらうこともだが、いろいろな所から来たこどもが一緒に関わったほうが絶対によさそうだと思う。PROJETO CONSTRUIRのこどもたちと堺の小学校のこどもたちが、演劇や表現に興味があればそれでもいいし、何か自分で選んで、みんなで遊ぼうという感じで、交ざる場所があるといい。そんなことは実現するのだろうかとも思う。学校で出会わされるよりも、行った所で出会って、大人も交ざって一緒に遊んでしまうと、何か越えられるようなところがあるのではないか。（大熊）
- 場所さえあれば、老若男女問わず誰とでもできるワークショップを目指しているので、男性１人で来たり、女性１人で来たり、こどもと一緒に来たりできるようにしている。でも、やはりこどもの割合が多いので、大人も来たければ来てほしい。（井上）
- こども食堂は「こども」と付いているけれども、別にこどもだけのための場所ではなく、そこに関わる大人や、いろいろな世代の人たちともっと関われたらいいなと思っている。それこそこども食堂に対するイメージがそれで変わったらいい。（古橋）
- 私は最近、作品をつくったり、みんなで「できました」と言うことに興味がないことに気づいた。何をやっているのかというと、例えば「今日は鼻歌を歌いたくなる」という人と「鼻歌って普段歌いたくなる？」という人が一緒にいる中で、自分と違う価値観と出会うことにドラマがあると思っている。コミュニケーションのワークショップと言うのはあまり好きではないけれども、結局コミュニケーションだと思う。（大熊）
- 「なぜこのような言葉を思い付いたのだろう。私だったらこの言葉は絶対に選ばない」ということの繰り返しが、結局表現になって、相手との出会いになって、それがドラマになって、私たちはこの世界で生きている。それでいいし、それがいいと思う。それがもう十分演劇である。（大熊）
- （コーディネーターはどのようにして育つのかという質問に）私は音楽家として音楽を追究したい。一方で、コーディネーターとなる人も、極端にみんなが音楽しか追究しなくなったら、多分、よくない感じになると思う。だから、違う立場をキープし続けて、時には議論になるぐらいが、きっといい現場がつくれると思う。私は音楽家として全力を発揮し、コーディネーターとして全力で関わってもらえたら、きっといい現場になると思う。（古橋）
- アーティストとはまた違う層の目線でいていただけるのがすごく助かるし、ありがたいといつも思っている。私が一生懸命やって見えていないこともたくさんあり、「ここでこういうことが起こっていましたよ」と、私の気付かないところを後で言っていただけるのも、すごくありがたい。私が関われていなかったところを客観視していただいて、いい意味の立場の違いを使って視点を変えていただけるのはいつもありがたいと思っている。（大熊）
- イレギュラーを楽しめるといいと思う。「ああ、これはどうしましょう」となったら、一緒に戦えるというか、その波に一緒に乗っていただけると、すごく心強いと思う。（大熊）
- その場にいた人や、通じる人には通じるころがある。一方、その対極のものとして、みんなで分かりやすく盛り上がる音楽が出されることがある。分かりやすく盛り上がる音楽に簡単に行ってしまうつまらなさも感じるのだけれども、でも、分かりやすく盛り上がる音楽の中に、すごく面白いことも同居するのではないかと、最近思っている。（古橋）

2. 食堂スタッフへのヒアリング

(1)実施概要

実施日： 令和７年1月27日（月）17:00～18:30
会　場： 堺市立東文化会館　多目的室
参加者： 古藤紀代恵さん（いづはまスマイル食堂）、谷岡裕喜さん（にしのこ☺まんぷく食堂）、田中ルジア みやさん（PROJETO CONSTRUIR）
聞き手： 大澤寅雄（合同会社文化コモンズ研究所）

(2)意見要旨

①関連プログラムの実績

- にしのこ☺まんぷく食堂を開始してもうすぐ９年になる。自分は立ち上げからいるが、当初は中心ではなかった。こども食堂の他にも学習支援もずっと続けているが、最近の活動では金曜日に中高生のスポーツ交流などもしている。（谷岡）
- PROJETO CONSTRUIRはブラジルにルーツのあるこどもたちのいろいろな活動をサポートしている。ポルトガル語を継承語として土曜日の午前中に勉強し、その後にこども食堂を開いている。（こども食堂を含むいくつかの事業を運営する母体の）団体としては去年９月で16年を迎えた。こども食堂としては今年で７年目だと思う。（田中）
- いづはまスマイル食堂で副代表をしている。平成30年の10月からオープンし、7年目に入っている。活動は会食やお弁当、こどもたちとごみ拾いに行ったり、長期休みの宿題をみんなで一緒にしたりする活動を、不定期だが月に1～2回ぐらいしている。（古藤）

②プログラムへの期待

- にしのこまんぷく食堂では、前年度、ものづくりのワークショップにこどもたちがたくさん来てくれて、普段見られないような様子も見られたので、ものづくりを継続でお願いしたいと財団にお願いし、 井上嘉和さんに来ていただいて段ボールのお面づくりになった。こどもたちが「内弁慶」というか、人が周りにいて発表するとなると恥ずかしがるので、創作系、美術系でいくことにした。（谷岡）
- 市営住宅の建て替えが進んでいて、住民が退去し取り壊す予定の団地があるので、思い出に残そうと市営住宅の中と周りでこどもたちがつくったお面をかぶって写真を撮った。そのような経験を、なくなる団地でするというのが、こどもたちにとってどのような影響が出るのかということを僕たちは期待していて、楽しみにしていた。（谷岡）
- 食堂だけではなくて地域の特性を踏まえて財団が一緒に考えてくれたのが大きい。僕たちが大事にしている地域性、地域に溶け込みながらというのがあった上での内容になった。（谷岡）
- PROJETO CONSTRUIRでは、こどもたちに言葉の壁があるので、昨年度の１年目は、自分たちでいろいろな表現をすることをやって、結構こどもたちも変わった。こどもたちだけではなくて、お父さんお母さんも参加した。ブラジルでも日本でも、違う地域から来ているので、文化の違いがあったりした。（田中）
- 昨年度に引き続きぱんださん（大熊ねこさん）に再び来てもらうように財団にお願いをして、その２年をかけて８回のワークショップだったけれども、何年も一緒に協力しているような関係になった。小さなこどもも、いつもは恥ずかしがる女の子も舞台に上がって、誰も恥ずかしがらなかったのが非常によかったと思った。（田中）
- 場所をPROJETO CONSTRUIRからサンスクエア堺（堺市立勤労総合福祉センター）に変えてやったとき、ぱんださん（大熊ねこさん）のワークショップで、ダンスをするわけではないけれども（結果的に）ダンスになったりして驚いた。こどもにとって、言葉だけ、ジェスチャーではなくて、体全体を使って表現するのが非常によかったと思う。（田中）
- いづはまスマイル食堂に来るこどもは生活背景が複雑で、おそらく芸術の体験活動が少ないだろうと思い、音楽ワークショップで、古橋果林さんに来ていただいた。音楽ワークショップ自体は今年で３年目に

なり、最初は小学生が対象で来てくれていたが、学年が上がると少し恥ずかしさも出てくるところがあった。（古藤）

- ２年目に、未就園児などを対象にして親子でのワークショップを１回実施した時に、今まで来てくれていた小学生や中学生が「お手伝いスタッフ」として関わってくれる機会があった。それが自分の役割や成長を感じられた。（古藤）
- 今年度は３回とも「親子スペシャル」として対象を未就学児とその保護者に設定し、反対に小学生や中学生にはプロのアーティストたちと一緒に交じって、当日楽器を指導してもらい、演奏の中に入ってもらった。自分たちもスタッフとして小さな子とお母さんを迎え入れる場ができてきて、非常にいい形になったと思う。（古藤）

③こどもの居場所へアーティスト派遣することの価値

- ワークショップの参加してくださったお母さんから「お話ししたことがない方と円になって、音楽に合わせて体を動かして一つになって、上手に言えませんがハッピーな気持ちになります」と感想を聞かせてもらった。その方は３年前ぐらいから食堂に通ってくれていて、現在はシングル世帯で、こども食堂の行事には毎回積極的に参加してくれて、芸術体験をしてハッピーになれたことが非常にうれしかった。（古藤）
- 他にも「大きな会場などでは敷居が高いと感じるところを、こども食堂で身近なお姉さんと和やかな雰囲気で過ごすような感覚でとても楽しめた」「会場がいつものこども食堂なので、大人もリラックスして参加できる」というような感想をいただいた。（古藤）
- こどもスタッフで参加してくれた子たちからは、「プロの人と一緒に演奏できて、指の速さや音の迫力などにとても感動して、普段できない体験がたくさんできてうれしかった」という感想もあった。アーティストの方だけではなく、財団、調理をする私たち、こどもスタッフたちも、自分たちの役割をしっかり持って、まとまって一つの何か大きな輪ができていると思って、非常にうれしい姿だと思った。（古藤）
- 中には最近少し不登校になっているような子もいるが、目的があってその場に行って、役割があって、チームとして自分が動くということが非常に円滑に回って、とてもいい動きだったと思った。ワークショップの場所はここ、ご飯を食べる所はここ、遊ぶ所はここという積み重ねの安心感を持ってくれている。普段の活動なども、例えば「宿題をしよう会」などでも、ワークショップに来てこどもスタッフとして関わっている子たちは非常に積極的に手伝ってくれたりする。（古藤）
- ぱんださん（大熊ねこさん）のワークショップは２年間で８回だけだけど、PROJETO CONSTRUIRのメンバーになっている。みんなが、チーム全体が、友だちだ。最近、学校でもその影響があると思う。学校で少し暗い様子のこどもや「恥ずかしい」と言うこどもが、徐々に話せるようになった。（田中）
- 学校からは「日本語が非常に上達しています」と言われる。大人とコミュニケーションを取るのが本当に難しかったけれども、家族以外のいろいろなお母さんと話したり、外からいろいろな人も来たりして、この２年間のワークショップが一番大事だったと思う。たぶんいろいろな人と話すことが非常に大事だと思う。（田中）
- にしのこまんぷく食堂では段ボールでお面をつくるというワークショップだったが、お面をかぶったことでの変化が、僕たちも実際に少し見えた。２年前のワークショップのときは、恥ずかしがってダンスを拒んでいたこどもたちの中で、今回のワークショップで、お面をかぶったらアフリカンミュージックに合わせて生き生きと踊っている子がいた。（谷岡）
- 今回は発表という形ではなかったが、屋外で、みんなでお面をかぶりながら踊ったり、アフリカの楽器をたたいたりしたので、結構見に来てくれた人も多かった。これまでに比べると結構（いろんな人に実施の様子を）見てもらえたのが大きな違いと思っている。普段、僕たちの地域のことに関わっている部署の堺市の職員も見に来てくれて、本当にいろいろな人が交ざり合って、にぎやかなワークショップだった。保護者からも「うちの子、楽しみにしとったんや」という連絡があった。家でもこのワークショップを話題にしているのが見えた。（谷岡）
- 昨年度に比べると、こどもたちもワークショップで創作のイメージが湧くのが早くて、初回からどんどん創作に掛かってくれていた。ワークショップに遅れてきて参加のタイミングを逃してしまったこどもたちに、大人が声掛けをしたものの、外から見ていたら恥ずかしそうで、「あんなん、私らできへんし」と言っている子たちの声も聞けた。でも、ここまで来ているから、本当はしたかったのだと思う。そういう様子も近くで見られてよかった。（谷岡）
- いづはまスマイル食堂の音楽ワークショップは、こどもスタッフの集合はワークショップ開始の15分前だったのを（もう少し早く来てもらうようにして）、先入りして会場の雰囲気になじんだり、アーティス

トが場をつくるまでの準備（リハーサル）を見て、自分たちの役割を感じてもらったりして、慣れるための「クッションの時間」があったほうがいいと思った。こどもたちも、とてもきらきらした目で音楽ができ上がっていく準備の様子などを見ていたりした。（古藤）

- お母さんたちにも、特に初めて参加する場合は緊張しないように、ワークショップの雰囲気の場を楽しんでもらえるように、「手が足りないから、ちょっと早めに来て手伝って」と言って来てもらって、お母さんたちにも中に入ってもらったりした。（古藤）
- PROJETO CONSTRUIRのこどもたちもお母さんたちも、「来週はワークショップがあるから」とずっと待っている。お母さんの居場所になっているから、時々、こどもより大人のほうが多い。一番変わったのは、「自分たちも舞台に上がるから」と積極的に入ってくれた大人たちが結構多かったことだ。お父さんたちも来たら普通に入るようになって、１年間でだいぶ変わった。（田中）
- アーティストとこどもたちが作業中以外にゆっくり関わる時間というのがなかった。ワークショップはワークショップだけ、食堂の時は食堂で、という区別を自分たちもしてしまっていた。ワークショップが終わったあとの振り返りを、今年度からは「別日にしてください」というお願いをしたが、それは高校生や中学生など、手伝ってくれた子たちと大人が話す時間を大事にしたいという内部の意見があったからだ。（谷岡）
- いづはまスマイル食堂は、昨年度まではお昼ご飯を食べて集合して、それからワークショップをするというスタイルだったが、今年度から午前中の開催で、お昼ご飯を食べて解散という形にして、アーティストも財団スタッフもこどもたちと一緒にご飯を食べるようにした。ご飯を一緒に食べるという関わりは、やはり意味があるのではと思う。同じ釜の飯を食べると仲間になるというところはあるだろう。（古藤）
- 「この子に来てほしい」、「この子とはつながっておかなければいけない」という子がいても、その子は家でスマホに触れているほうが過ごしやすいと思っているかもしれない。そこで「ご飯だけでも食べにおいで」と言うと、きちんとワークショップに間に合うように来る。「ご飯を食べる」ということが、こども食堂でワークショップができる非常に大事な部分でもある。同時に、ワークショップというのは非常にスペシャルな環境だと思う。経験値が少ない子たちが、これほど素晴らしい人たちが来てくれて近くに感じる機会はないから、ワークショップの時はもう一つ力を入れて声は掛けている。（古藤）
- こどもたちの中には、先生に言えないこと、お母さんに言えないけれども「絶対言わないで」と、小さなことでも詰まっている子もいる。「何かあったの」、「何もなかった」、「どうしてそんな顔？」と言うと、最後に「実はこんなことがあった」などと話してくれる。（田中）
- 少しこどもの様子が違うと思ったら、お母さんに連絡して「食材があるからどうですか」と言って連絡して、話をするようにしている。それで、お母さんの様子も感じながら、こどもの様子もお母さんから聞きながら、といったことはしている。（古藤）

④実施に向けた課題

- 次年度は、何か一緒につくり、それを見せたい。アートは非常に大事な表現で、自分がしたいことをサポートがあって形をつくる。形は何でもいい。音楽でも、絵を描いてもいい。（田中）
- 周りの地域で、いろいろなところで見せたい。私たちは周りの地域（との関係）が少し難しい。（PROJETO CONSTRUIRだけではない）どこか他の場所でも発表すればいいと思う。（誰に見せたいのかという質問に対して）こどもと関わっている先生たちや教育委員会に見てほしい。こどもに対して「この子はできる」という力を与えるのは大人なのに、先生は働き過ぎで見えなくなっている。こどもに関わりのある人たちを招待して、「本当はできますよ」と見せたいと思う。（田中）
- この活動を他の食堂でもしてほしいと思う。財団と一緒にしながら、僕たちも迷惑や負担を掛けている部分があるので、その負担をどのように減らすのかが課題だと思うし、何か減らせることはないだろうかと思っている。「こどもたちに配膳して、こどもたちと話しながらというだけでも精いっぱいなのに、ワークショップをするのは無理だ」という声もあったりする。（谷岡）
- 地域資源の活用などができたら面白いと思う。「うちは難しいです」と言う団体があるのなら、そこを何か堺市がフォローをして、行政ができるフォローをしながら地域とのパイプ役になってもらえれば、地域の活性化にも繋がるのではないか。（谷岡）
- にしのこまんぷく食堂では割と地域内の施設や団体と横のつながりが元からあったので、僕たちが声を掛けたら「一緒にやろう」「おもしろそうやな」となったが、他の食堂では自治会とのつながりも薄かったりすると聞く。行政側がこども食堂と自治会との連携を促したり、財団ではなくて堺市社協など、自治会とは別の事業を介してこども食堂と地域がつながっていたりすると思う。例えば、地域の祭りにこども

食堂で実施したワークショップの内容で何か出店したり、盆踊りなどにワークショップを絡めて「一緒にやろうよ」と、こども食堂の名前で何かできたらいい。（谷岡）

- いづはまスマイル食堂も毎回声を掛けていただいて本当に幸せなことだと思うが、それが広がるといいと同じく思っている。前から「こども食堂と財団が協働してくれてこんなワークショップがありますよ」などと言っていて、「見学がてら参加者として来てみない？」と誘って、今回来てくれた親子さんがいらっしゃった。（古藤）
- 財団スタッフのみなさんは非常に親切で丁寧に寄り添ってくれて、そういった方たちと一緒にできるという安心感なども体験していただきたい。徐々にチームとしてよくなってきているとありがたく思っている。こどもたちは「堺市文化振興財団の人」ではなくて「ああ、あの人」という近しいお兄さんお姉さんのように思っていると思う。（古藤）
- こどもたちも家で親以外とは会わない。学校に行っていなければなおさらだ。こども食堂は「今日、来てくれたのね。ありがとう」「おはよう。元気？」など、来るだけでいろいろな人が声を掛けてくれて愛情に包まれるというか、そういう場所だと思う。（古藤）

令和６年度「こども食堂における芸術家派遣事業」
事業検証調査　報告書
令和７年３月
合同会社文化コモンズ研究所